魔法少女リリカルなのは～リリカル まじかるつい書いちゃったんだ ～

秋時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはリリカル まじかるつい書いちゃったんだ

【Nコード】

N2996T

【作者名】

秋時雨

【あらすじ】

神は聞いた。彼方がイレギュラーですかと。

イレギュラーは答えた。はい、私がそうですと。

この物語に介入するつもりですか、と神が問う。

少年は答えた。いいえ、そんな気はありませんと。

ならばどうするのですかと神がさらに問うた。

俺は介入しませんが、アイツに全てを任せました、と少年は答え
た。

調子に乗って書き始めた初二次創作小説。しかもよりもよって
なのはブランドなうな代物。絶対扱いきる自信はないが大丈夫だ、
問題ない。どうせこの小説はなのはブランドの裏世界でひっそりと
幕を閉じる事になるんだろうし。

注意事項！この小説を読むにあたって（前書き）

調子に乗った結果がコレだよ！

一応はやて？がメインな話から進めていききたいと思っています。
原作が来い。

注意事項――この小説を読むにあたって――

「 よう。俺だ。あ？ 誰かって？ そのうち分かるから今は説明しねえぞ」

そこは見渡す限り黒の空間。

「俺の事はどうでもいいんだ。このページではこの小説を読むにあたっての注意事項を教えるぜ」

真っ暗で真っ黒な空間に一筋の光がどこからか差し込んでおり、それが先ほどから言葉を話す誰かを照らしている。

「まずその一。作者は原作知識はゼロだ。一応二次創作は読んでるみたいだな」

その誰かは黒いコートに黒いフードで身体と顔をすっぽりと覆っており、どんな姿かは確認出来ない。

「その二。原作知識がないという事は、それすなわちキャラの事も分かっていないという事。早い話がキャラ崩壊あるから気をつけてくれて事だ」

その誰かは人差し指と中指をピツと伸ばしている。

「その三。知識を補充しながらの更新だからかなり不定期になる。それでもいいぜ！ ってなDMさんがいたら是非読んでやってくれ」

最後に薬指をピツと伸ばす誰か。

「さてさて。長つたるい前置きは面倒だろ？ だからここら辺で終いとすとくぜ。じゃあ、また後でな」

手をコートの中に仕舞い、どこかへと去っていく誰か。

後に残ったのは、真っ暗で真っ黒な空間のみ。

注意事項！この小説を読むにあたって（後書き）

プロローグだと思ったか？ただの注意書きだよ！

？「露骨に注意を促す……いやらしい」

え、なんで。いやそんな事はどうでもいいですね。

というわけで始まってしまった二次創作。注意書きにもある通り更新はかなり不定期になると思います。知識を蓄えないといけないので。

？「ならちゃんと知識手に入れてから書くべきだったな」

うるさい。ガイアが囁いたんだからしょうがないじゃないか。

？「しょうがないね（笑）。てかいい加減この表記やめろし。ちゃんと名前あるんだし」

そこについては触れないで。

さてさて。こんなグダグダな感じが終始付き纏う予定のこの小説ですが、まあ、よろしくお願いします。

？「まあ、どうせ見るヤツなんてなのはタグにホイホイされちまつたぐらいのヤツしかいないだろうけどな」

そこ！読者様を煽るような事言わない！

プロローグ〈海鳴市の車椅子少女〉（前書き）

不定期（笑）とか言っというて即座に投稿するのが私クオリティ（
キリッ

主人公とヒロインの接触となります。上手く書けるか今から心配
でたまらない……さて、胃薬はどこにあったかな。

プロローグ 海鳴市の車椅子少女

海鳴市の図書館。大きくも無く小さくも無く、丁度いいという言葉が合う大きさのものだ。

取り揃えている本もそこに種類があり椅子に座りテーブルに本を置き熟読している者や、今まさに借りようとしている者もいる。

そんな図書館の利用者たちの中に一際目立つ少女がいた。

茶髪のショートカットに可愛らしい大きな瞳の
車椅子に乗った少女。

読みたい本があるのか懸命に車椅子から身を乗り出し、んにーつと手を伸ばしている姿は思わず守ってやりたいと思いたくなる姿だ。

そして、更に目立つのは。

「……………」

それをやや離れた位置で椅子に座りながら監視するような目つきで見つめる少年。

まるで血でも吸ったかのように紅いボサボサのショートヘアに、ただひたすらに無表情な顔つき。

彼の周りに人がいない事からもやや目立っている事が分かるだろうか。

「……………」

少年は周りからの視線すら気にせず目を瞑って腕を組み、

(……………目標を確認した)

と、誰かに念話を飛ばした。

そんな怪しげな少年がいる海鳴市の、遙か上空。

海鳴市全体を見下ろせる位置に『胡坐をかいて雲の上に座っている』誰かがいた。

真っ白な肌に、腰まで伸びる艶のある黒髪。やや釣りあがった目つきを見れば『彼』が好戦的である事を告げる事が分かる。

そう。一見少女のような可愛らしい見た目をしているが、彼は男なのだ。ちなみに彼の性別を間違えるような事をすれば二度と朝日を拝む事は出来なくなるだろう。

(……ん、了解。合図があるまで待機)

そんな少年はそんな内容の念話を誰かに飛ばした。

(……分かった。引き続き様子見をする)

そして、やや遅れて帰ってくる返事。

返事が来た事を確認した後、少年はそこで念話を切った。

「さて。うまくやってくれるといいが……」

少年が空に向かって一人呟く。

『まだ心配なのか？ 君が手塩にかけて育てた息子なのだろう？』

少年の背後から不意にそんな言葉が返ってくる。

「まあそうなんだけどさ。イレギュラーってのはどこにでもあるわけだし」

『それは君の事を言うんじゃないか？』

「まあそれもそうだな」

少年はそこで少し笑ってから自分の背後を見やる。

そこにいたのは、黒いマントに黒いローブで身体と顔をすっぽりと覆った『誰か』。

「しかしお前も暇なんだな……仕事とかないのか？」

『この世界の管理が仕事だからね。君がいると楽出来るよ』

「さいですか」

黒いローブを纏った『誰か』はくっくつと笑う。

少年はその姿にため息を吐きながらも、

「てかさ。アンタ仮にも『神』なんだろう？ こんな一般人相手にしてていいのか？」

『君が一般人に見える人は多分耄碌してるんだろうね』

「……さいですか」

『誰か』……いや、『神』が笑い、少年がそれにため息を吐く。

(……あーあー、こちら俺だ。そろそろ行動を開始してくれ)

(……了解した。任務を開始する)

(いやそんな気張らなくていいから。普通に接してくれ)

(了解した)

一度切った念話をもう一度繋げてそんな会話をした後再び切り、そして三度目のため息。

「いつからアイツはあんな言葉ばかり選ぶようになったんだか……」

『君が育てたんだろう？ なら君に影響されたと思えないが』

「俺あんな堅苦しく育てた覚えなし」

少年が、本日四度目のため息を吐いた。

海鳴市の図書館内。

今まで全く動かないでいた紅髪の少年がバツと椅子から立ち上がり、周りの人達がそれにビクツと震えた。

「……」

少年が一度辺りを見回すように首を動かし（一般人にはそれが威嚇してるように見えたのか、さらに身を震わせた）、やがて例の車椅子少女を視界にロックオンし、少女に向かって歩き出した。

その顔は終始無表情で、まるで感情が抜き取られたかのようにも思える。

車椅子の少女はそれに気づかず、高い所の本を取るため色々試行錯誤している。

そんな少女にズンズンと近づくと少年。

少女と少年の間が一メートルくらいになった時、少女も流石に近づいてくる少年に気づいたらしく声をかける。

「あ、えと……何でしょうか？」

首を僅かに傾げ、関西訛りのある言葉で話しかける少女。

少年はその言葉を見向きもせず、少女が手を伸ばしている所へ手を伸ばした。

そして少女が取りたがっていた本を手に取り、それを無言で少女へ差し出す。

「ど、どうも……」

「……気にしなくていい」

少年にやや気圧されながらも例を言う少女に、少年が抑揚の無い声で答えた。

「……他に、届かない本はあるか」

「え？ でも」

「……そういう性分。気にせず言ってくれ」

「えと、じゃあこれとこれと……」

少女の言った本を次々と機械のように手に取る少年だった。

一方、こちらは遙か海鳴市の上空。

「ば……バツキヤロー！ 驚かせてどうすん！？ いや結果的によ
かったけどさあ！！」

髪の毛の長い少年が吼えていた。

『はははははは！！ やっぱり君は本当に面白いな！ 一体どうい
った育て方をしたらあなるんだい？』

背後で口元を手で押さえ笑う神。

「う、うっせー！ 初めての子育てだったんだからしゃーないやろ
！ お父さん頑張ったと！」

やや涙目になりつつ神にそう答える少年であった。

物語は、まだ始まらない。

プロローグ〈海鳴市の車椅子少女〉（後書き）

？「俺と」

私の！

『ずっと作者のターン！ のこおなあー！..!』

？「何そのネーミングセンス」

気にしないで。

さて。はじめましての方ははじめまして。お久しぶりの方はよくもまあこんな黒歴史小説を読んでくださりやがいますね。秋時雨でございます。

？「一応髪の長い少年として出演している俺です。おハロー」

このコーナーでは主にあとがき、後来るかどうかすら分からない読者様からの感想や質問などを紹介する予定となっております。

？「まあ、下手したらこの回で終了になるかもしれないんだよな」

あとがきとして機能すればそれでいい。

？「ああそう。欲の無いやつちやな」

しるたご。

さて。こんなカオスなタイトルの小説ですが、二十四時間質問感想罵詈雑言悪態罵り悪口煽りその他諸々受け付けております。気軽にコメントしてください。

？「お前のドM加減にはもう慣れたぜ」

あ、このハテナ君ですが。

？「ん？」

名前が分かったとしても感想に書き込むのは控えて頂けると嬉しいです。

？「なんでね」

いや、名前の件でそのうち複線はるうと思って。回収はしたい。

？「ああ、そう。まあそういうわけで俺の名前が分かるっていう酔狂なヤツがいても書き込まないように。よろしくな」

さて。それではまた次回があれば。アリー・ヴェデルチ！

第1話　ホイホイとついていけば

「いやー助かったで。ありがとーな」

車椅子に乗った少女が隣を歩く本を抱えた少年に笑顔を向ける。

「……気にしなくていい」

やっ。

ほんの少し前まで思いつきり少年の事を警戒していた少女であっ

だが、

『この文献によると、つまり……2012年、地球は崩壊するんや
』！』

『……な、なんだってー（思いつきり棒読み）』

『このネタが分かる、やと……！?』

『……これくらいは一般常識』

と。まあこのように色々と波長が合ってしまった結果、

「私ははやて。八神はやてって言うんや。君は?」

「……神楽。神楽要」

「かなめ君言うんや。ホントにありがとーな！」

名前を交換し合うまでになっていた。

図書館で少年 要が抱えていた本を借り（全部で五冊ほど）、
図書館を出る二人。

外に出ると、これまた色々な意味で目立ちそうな女性が一人。

「あ、シャマル。迎えに来てくれたんか？」

はやてがシャマルと呼んだ女性に話しかけ、呼ばれた女性が『主
はやてのためですから』と笑顔で応えた。

「（……主？）」

その単語に僅かに首を傾げる要であったが、『ああ、そういう趣味の人達なのか』と思いつきり間違った見解をぶちかましそのまま納得。

「紹介するでシャマル。要君や。私の事手伝ってくれたんやで」

ややおっとりとした雰囲気を放つシャマルが要にありがとうございまして、と頭を下げる。要が気にしなくていいと返事をし、

「……重いだろうから、この本はこのまま俺が持っていこう」

「え？ いや、別にそこまでせんでも……」

要の提案にはやてがやや遠慮するように両手をぱたと振る。

「……女性に重い物を持たせるべからず。親父がそう言っていた」

「そ、そか。じゃあよろしく頼むで」

流石にそこまで言われてははやても断る事は不可能だ。

要が本を持ち、シャマルがはやての車椅子を押し、家へ帰るべく歩き出した。

「……まさかあのネタが通じるとは

『君が教えたんだらう？』

「いやそうなんだけど。あそこまで棒読みされると教えたこっちが辛い」

海鳴りの上空でそんな会話をする神と少年。

「（ずいずい）……」

『……行きたいなら行けばいいだろう』

「いや、俺行っちゃいけないのよ。色々あるから」

『……そうかい』

「そ。色々あってあーだこーだでアツーなって裏世界でひっそりと幕を閉じる事になる」

『とりあえず元ネタをしっかりと私に説明してから使ってくれないか』

「かなめ君ここまでありがたいな。助かったで」

「……何度も言うが、気にする事はない」

はやての家についた三人。

はやての家は、なんというか。二人で住むにはやけに大きい家だった。

「……二人で暮らしてるのか？」

「うん？ いや、私らだけやないで」

ふと要が疑問を口にすればはやてがそれに答える。

「……そうか」

玄関の扉を開け、とりあえずお邪魔する事にした要。

「……本はここら辺に置けばいいか？」

「あ、うん。お願いするで」

抱えていた本をテーブルの上に置き、ふうと一息吐く。

「……じゃあ、俺はこれで」

「え、もう帰るんか？」

役目を終えた事ではやての家を後にしようとした要だが、それを
はやてが呼び止める。

「どうせもうご飯の時間なんやし一緒に食べていってや」

「……そこまでされる義理は」

「いっていいって！ 手伝ってくれたお礼や！」

流石に笑顔でそんな事を言われれば断れる人間はそういないだろ
う。勿論要もその例に漏れる事はなく。

「……なら、頂こう」

「了解や！ 腕が鳴るでー！」

車椅子に乗りながら片腕を回すはやてに、隣にいたシャマルが小
さく笑みを零していた。

「……いたいけな少女の手作りご飯、だと……（ギリリッ）」

『いや。羨ましいなら行けばいいだろう』

「駄目なんだよ俺が行ったらよ！ 行きたいけど行けないんだよ！
俺が行ったらD e d o r D i eなんだよ！」

『……そうかい』

上空から要の姿を見下ろす少年がギリギリと齒軋りをし、それを見た神が呆れている頃。

「ただいま帰りました。主はやて」

「あ、シグナムにヴィータお帰り。最近よく出かけるけど何かあったんか？」

「……いえ、ちょっとした用事です」

玄関からピンク色の髪をポニーテールにした女性と、赤毛のはやと同じかそれより低い身長少女が家に上がる。

「……主はやて。この方は？」

シグナムと呼ばれた女性が要を見やり、その後はやてに質問する。

「かなめ君言うんや。今日図書館で色々手伝ってくれてな」

「……………」

要が軽く会釈し、シゲナムも会釈。

ヴィータと呼ばれた少女の方は家に帰るや否や隅っこで大人しく寝ていた狼のような犬のような、よく分からない生物へと駆け寄りモフモフしていた。要としては不思議な子だなー程度にしか思っちやいないが。

「……む。蒐集はもう始まっているのか」

『べつやらそのようだね』

「どつやら原作通りドラゴン狩りしてるっばいな。ページは全然集まってるじゃないけど」

『で、君はどうするんだい？』

「あいつに任せておきたい所だが……まあ、たまには一肌脱ぐのも悪くはないな」

本日二度目の上空よりの会話。

『ほつ』

「さてさて。まずは自分の胸に腕を突っ込みまして……」じびゅ

『何か色々大変な事になっているが、大丈夫か？』

「大丈夫じゃない、問題だ。お次にリンカーコアを取り出しまして」

『……尋常じゃない血の量だが』

「大丈夫だ、問題ない。そして取り出した新鮮なリンカーコアを……
？ 転送！」

『で、アレは一体どこへ行くんだい？』

「うちの息子さんの所。ちょっと俺寝るから後見として」

『……痛いなら無理しなけばいいのに』

「……じゅ……痛い。痛いよじゅ……」

第1話〜ホイホイとついていけば〜（後書き）

？「……俺と」

私の！

『ずっと作者のターン！ のこおなああー！』

で、いきなりなんだけど大丈夫か？

？「いろんな意味で大丈夫じゃない。胸に無理やり穴あけた感じって言えば分かるか？」

おk把握。

？「さてさて。今回シャマルとヴィータの台詞が全くない件だが」

キャラを把握出来てないので今回は完全なモブキャラ扱いになってしまいました。色々と申し訳ない。

？「まあ、名前すら出されていない最後の守護騎士もいたけどな」

……そこについては触れないであげて。ただでさえ空気空気言われて可哀想なんだから。

？「まあいいさ。そのうち出番はいやでも来る」

まあそれもそうだけど。

土下座ならする覚悟は幾らでもある。

？「誠意を見せるならじりじりに焼けた鉄板の上で土下座するくらいはしろよ」

焼き土下座とかマジ勘弁。

……うん。本気で焼けた鉄板持ってきたんで私は華麗なバックス
テッポで逃げます。それではまた次回！

？「はっはー小僧が逃げたぞ！ 追え！」

第2話〜暗い夜道で〜

夕食のカレーは美味かった、と要は心の中で呟いた。

材料自体は一般的なものののに何故か絶妙な美味さだった。店に出しても誰も文句は言えないだろう。

そんな要は現在コンクリートで舗装された道をてくてくと歩いて
いる。

実はあの後はやてに家に泊まるよう勧められたが、流石に女の子の家に泊まるわけにはいかないと要が丁重にお断りしたのである。

そんなこんなで夕日も沈み、やや暗くなった道を歩いていたが、ふと足を止める。

「……………」

ポケットに不自然な重みを感じ、その中に手を突っ込む要。

そして中に何か異物があるのを感じ、それを引っ張り出すと、

「……………」

中から出てきたのは何故か血まみれのリンカーコアだった。

「……………」

要はそれを無言でポケットの中に再び突っ込んだ。そして今見たものを忘れようと歩くスピードを上げた。心境としては、早く寝たい。きつと疲れてるからこんな幻覚を見たのだろう。

「……………」

が、ふと何かチリチリとしたものを感じ取り足を止める。

改めて辺りを見回してみるが、辺りを照らすものが月の光と電柱の先に小さく光る照明だけとなりとても暗い。

照明で照らされている所以外は完全な闇に包まれており、その先

が全く見えない。

「……………」

要は周囲を警戒しながら見回す。

先ほど感じたチリチリとしたもの

恐らくは、殺気。

殺気を飛ばしてくるという事は、少なくとも平和的なものではない事は確かだ。

神経を研ぎ澄まし、静かに辺りを見回す要。

そして、殺気の正体が闇の奥から現れる。

カツ、カツとコンクリートの道を鳴らし、奥から出てきたのは。

「……………シグナム、といったか」

ピンク色の髪をポニーテールにした女性が厳しい目つきをしながら出てきた。

「……………何の用だ。忘れ物はなかったはずだが」

要が問いかけるがシグナムは質問を無視し、ゆっくりと要との距離を縮めるように歩く。

「……………」

シグナムが無言で要を睨む。はやてといた時は全く見せなかった

ような表情だ。

と、シグナムが突然歩みを止め、手に持った何かを要の喉元に突きつける。

それは、剣の形をしたデバイス。簡単に言えば武器だ。

「……穏やかじゃないな」

「一つ、質問がある」

要の軽口を無視し、シグナムが問いかける。

「貴様は一体何者だ」

「……何者、とは？」

シグナムの質問の意味が分からず要が思わず問い返す。

「何故主に近づいた」

「……困っていたから。それだけだ」

「……そうか。なら、もう一つ質問だ」

シグナムが限りなく低い声で要に言う。

「何故、貴様からは血の臭いがする？」

「……」

「そして私と貴様が始めて会った時、いつでも戦闘に入れるような姿勢をしていた。戦闘経験を積んでいる者でも分かり辛い程自然にな」

喉元に突きつけたままのデバイスにやや力を込めながら、シグナムがもう一度質問する。

「問おう。　　貴様は一体何者だ」

「……まあ、少なくとも『管理局』の人間ではない」

「その言葉を知っているという事は、貴様も　　」

「……まあ、魔力は大して無いが」

シグナムの言葉を遮って言う要。

「……それと、血の臭いというのは多分コレだろう」

要は喉元にデバイスを突きつけられたままポケットに手を突っ込み、そこからあの血まみれのリンカーコアを取り出してシグナムに見せる。

「リンカー……コア？」

「……ああ」

「貴様のか？」

「……いや違う。知人のものだ」

正確には親父のだけどな、と要は心の中で付け足す。

「……もういいか。早く帰りたいんだが」

「……まだ聞きたい事はあったが、まあいい。いきなり武器を突きつけてすまなかつたな」

デバイスを降ろしながら謝るシグナムに、要は気にしてないと答える。

「……ああそうだ。そのリンカーコアは貰っておいてくれないか。俺には必要ない」

「いや、私にも必要ないんだが……」

「……闇の書にでも食わせればいいだろう」

「っ！？ 貴様何故それを知って　　！！」

要の言葉に異常に反応し問い返すシグナムだったが、

「……いない？」

既にそこに要の姿はなく、ただ暗い夜道が続いていた。

いきなりだが、要には住んでいる家がある訳ではない。

ならどうするか？

答えは至ってシンプルだ。

「……………」

木の太い枝の上に毛布を被って寝転がる要。

そう。彼の寝床は木の上だ。彼は寝床さえあればどこでも生活し

ていけたりするので、拠点のようなものがなければこうして木の上
に上って眠ったりする。

「……シグナムといったか。中々鋭いな。流石騎士といった所か」

要が独り言を漏らす。

その言葉は誰にも聞かれず、ただ闇の中へ溶けていった。

第2話〜暗い夜道で〜（後書き）

？「まだ胸の穴が塞がっていない。俺と」

焼き土下座で失礼します。私と！

『ずっと作者のターン！ のこおなああー！』

うぐぐ……これ結構キツイ！顔が！腕が膝があああああー！

？「落ち着け。心頭滅却すれば火もまた涼し、だ」

そんな器用な真似が出来たら今頃やつとる！

？「さて。このやたらふざけたタイトルした小説だが、随時感想などは受け付けている。書きたきや好きなだけ書くといい。勿論作者が無能だとか作者がアホだとか作者はアツパピーだとかでもいいぞ」

それ全部私への悪口でしかねえ！

？「いきなり更新サボったからだろうが」

いやー、ね？マインクラフトってゲームの動画見てたら面白くてつい。

？「俺もつい殺っちゃっていいか？ 主にお前を」

ごめんそれだけは勘弁。

……と、まあ早速不定期更新となってしまったわけですが。

？「さーて次回のリリカルなのははー？」

あれ私の言葉無視！？

？「予告？ そんなものは投げ捨てるもの。それじゃまた次回な」

予告しそうな台詞がましといて全否定？

キャラ設定〜おいィ？お前それでいいのか？〜（前書き）

という訳でキャラ設定です。

まだ完全には固まってないのに公開しちゃうあたり私はもう駄目なのかも知れない。

キャラ設定「おいィ？お前それでいいのか？」

神楽 要（かぐら かなめ） 男

歳……はやてと同年一（はやての年齢分ならないため曖昧に）

身長……はやてよりちょっと大きいくらい

体重……一般的

魔力量……B

特徴

・子供らしい身体に血を吸ったように紅いボサボサのショートヘア
ー、ひたすらに無表情な顔。

・無口という訳ではないが、言葉を話すのに若干のタイムラグがある。

・口下手かと思えばあら不思議、話せば話すほど湧き出るネタの嵐。
はやてといい感じに漫才出来たり。

・感情を表に出す事がない。

????? (髪の長い少年) 男

歳……18くらい (目撃情報より)

身長……170くらい

体重……不明（考えるのが面倒とかじゃないですよ！）

魔力量……Unknown（不明）

特徴

・真っ白な肌、腰まで伸びた長い髪に、やや釣りあがった好戦的な目つき

・いわゆる男のk（ここから先は真っ赤な液体で濡れていて読めない）

・要と違い感情表現豊か。ついでにネタの数も豊か。胸は豊かでは（真っ赤な液体で濡れている）

・常時雲の上に座っている。風邪引かないの？とか空気薄くてヤバくね？とかそういう物理法則を完全に無視

????? (神)

歳……不明

身長……髪の長い少年と同じくらい

特徴

・いつも黒いローブとフードで身体を隠しているため姿は不明

・髪が長い少年とよく一緒にいる

・一応この世界の神

キャラ設定〜おいイ？お前それでいいのか？〜（後書き）

？「俺と」

作者の！

神「あ、あと私だ」

『ずっと作者のターン！ のこおなああー！』

あれえ神様？一体いつからここに。

神「いや、多分この先しばらくは出ないよ。紹介されたから出てみただけさ」

あらそう。

？「ところで作者。俺の紹介のとこやたら血まみれだったが？」

ああうんそれね。書こうとしたらどこからか鉛玉がやたら飛んできたんだ。おかげで真っ赤になっちゃった。

？「そうか（この野郎銃で撃たれて死なないとか化け物か……？）」

ん、何か言った？

？「いんや何も」

神「ところで作者」

はい？

神「ここはこの小説に寄せられた感想や質問などを公開してそれに答える、といったコーナーだったはずだが……」

……まあ、更新怠ったし感想来ないのは当然だね。これからは気をつけないと。

神「いつそ一日一話更新というルールを決めてみたらどうだ？」

それはネタ無くなって裏世界でひっそり幕を閉じることになるのは確定的に明らか。

？「無理にネタ混ぜるからこうなるんだな」

さあそれでは次回より普通に話を進めますよ！

？「あ、強引に切った」

第3話〜未確認少年地に降り立つ〜

じりじりと身を焦がすような陽に照らされながら、髪の高い少年が海鳴の公園のベンチに座っていた。

「……………」

時刻は昼食には遅く、夕食には早い。子供向けに言えばおやつ
の時間、と言った所か。

「……」

少年は頭の後頭部に両手をあて、何か唸っていた。

「……あるえー？」

そして散々唸った後、小さな疑問を零す。

「俺、何でここに来たんだっけ？」

「翠屋のケーキが食べたい」

元はと言えばこれが発端の言葉だったのだろう。

『買いに行けばいいだろう?』

うだーと唸る少年を見もせず神が言う。

「いやーでも買いに行くって事は下に降りる事であってあれがこーなってそーなって……。誰か買いに行ってくれたりしないかなー」

白々しくそんな台詞を吐きながら神の方をちらちらと見る。

『……残念だが私は普通の人には見えないぞ』

「なん……だと……!?!」

神の予想外の答えに落胆し、思わずその場に両手両膝をついて落ち込む少年。

『当たり前だ。私は仮にも神なんだぞ? 普通の人間にホイホイと見られたりでもしたら色々大変なんだよ』

くっくっく喉の奥で笑う神。

『だから言っただろう? 買いに行けばいい』

「……………」

神の囁きにしばし考えを巡らせる少年だったが、

「……ま、まあ主要キャラにバレなけりゃあいいんだし。いいよね？俺行ってもいいよね？答えは聞いていないそうと分かれば準備してよし完了いざれっつぱーりいアイキャンフライ！」

音を置き去りにする速度で少年が雲の上を一瞬動き、そして常人には見えない速度でそのまま雲の上から地上へダイブ。あつという間に少年の姿は神から見えなくなつた。

「……何をそんなに警戒しているんだか」

神が呆れたようにそう一言漏らした。

「よくよく考えればあの時アイツがいなければ俺はここに来なかったんじゃないか……？　つまり原因はアイツ、と。後でメようそうしよう」

少年が先ほどとは違いやたらスッキリした顔で頷くと、ベンチから立ち上がって辺りを見回す。

「そうと決まればまずは翠屋を探すべきそうすべき。どこにあったっけ？」

しばらくキョロキョロと首を動かしていたが、やがて一点を見据えたまま動かなくなった。

少年の視線の先には　。

小さな男の子が道路に飛び出した。道路にはボールが転がっていた事から、恐らくあのボールで遊んでいるうちに道路へ飛び出してしまったのだろう。

男の子は気づかない。

飛び出した道路の先に、大型のトラックが迫っている事を。

そしてそれを、一人の少女が見てしまった。

栗色の髪にサイドポニーの、まだ小学生の少女だ。

この少女、魔法が使えるという何ともファンタジックな事が出来たりするのだが、そういう話は今ここですべきではない。

近くに大人の姿は見えず、あのまま誰も助けに入らなければ確実に男の子はトラックに撥ねられ無残な死体となるだろう。

「助けなきゃ」

少女が一言呟き、今もトラックが走る危険な道路へ飛び出す。

そして少女が男の子を反対側へと突き飛ばし、入れ替わりにトラックの前へ立つ。

トラックに乗っていた男性が少女が目の前にいる事に気づき慌ててブレーキを踏む。トラックというのは車体が大い分下が見えな
いのだ。

少女とトラックがぶつかるまで後、数センチ。

「……っ!!」

少女が死を覚悟した、そのときだった。

「危ねえな」

少年にしては高く、少女にしては低いアルトボイスが少女の耳に届いた。

ズンッ！ と空気が振動しトラックがぶつかる。

……が、少女が吹き飛ばされたというような事はなかった。

「……え？」

少女が恐る恐る目を開ける。

そこには、何とも不思議な光景が広がっていた。

髪の毛の長い人がこちらに背を向け、

トラックを片手で受け止めていた。

(あ……あぶねえ！ ホントにあぶねえかった！ 下手すりゃ俺死んでたよっわー！ 奇跡の生還！)

少年が内心冷や汗をかきながら心の中で呟いた。

「だっ、大丈夫かアンタら!？」

トラックを運転していたらしき中年の男性がトラックから降りてくる。

「ん？ 大丈夫だぞ。これからは前に気をつけて運転するように」

男性がペコペコと何度も頭を下げてからトラックに再び乗り、どこかへ走り去っていった。

「さっ」

少年がぐるんと少女の方へ振り向き、

「大丈夫かじょうちや」

「……?」

少女の顔を見るなりピシッと硬直した。少女がその姿を見て疑問に首を傾げる。

少年の顔から大量の冷や汗が流れる。

「……」

「あ、えと……ありがとうございます」

少女が少年の異変に気づかないまま頭を下げる。

「あ、いや……うん。これから気をつけるように」

ようやく搾り出したといった感じで少年が返事をした後、再びぐるんと身体を回し少女に顔を見られないようにした後、

(やべえよやべえよまさかの主要キャラだよてか主人公キタコレだよ会っちゃいけないとか思ってる時に来るとか何？ 俺いつフラグたてた？ いやそれよりもかわいゲフンゲフン俺はロリコンじゃないまずはおち着けおち着いて冷静にクールに行こうぜよしおち着い)

「あの……」

「ひゅいつ!?!」

「うえ!?!」

後ろを向いて何やらぶつぶつと呟き始めた少年に少女が声をかけた途端、少年の身体がビクンと反応しそれに驚いた少女が声を上げる。

「大丈夫……ですか?」

「ああうん。大丈夫だ、問題ない」

「それって確か大丈夫じゃない時に言うような……?」

何故バレたし! と少年が心の中で呟いた。

「……とうかさっきのってまほ」

「そ、そそそそそっだ！ 君はどうしてこんな所で何をしていたのよ？」

「落ち着いて!? 落ち着いてください!」

「ハッ!? そ、そっだな……まずは落ち着こうか。はい深呼吸。すってー」

「すー」

「はいてー」

「はー……って！ 何で私ができるんですか!？」

「あるえ間違った!！ すべきなのは俺やん!」

「はいすってー」

「すー」

「すってー」

「すー」

「すってー」

「すー……!？」

「すってー」

「すー……ちょ、ま、もう無理ぽ」

「すってー」

「すーがつふえー！！ げほがはー！！ テメエこら鬼畜か！？ 鬼畜
なのかこんちくしょうー！！」

結論として、少年の混乱が少女にも伝染した。

とりあえず気を落ち着けるため、先ほど少年のいた公園のベンチに座った二人であった。

「……………」

「……………うん。落ち着いた。で？　なのは　　って言ったか。何であんな危険な事した？」

少年は実はこの少女　　高町なのは　　の事を既に知っている。が、初対面で知っているなどと言えば怪しまれる事必至なので隠していたりする。

「……………ごめんなさい」

「いや怒ってんじゃないくて」

なのはがシユンと頭を垂れる。

「で、でも！　あの男の子を助けたくて……………！」

「……………正義感があるのは大変いい事だが、勇気と無謀は違うんだぞ？　あの場合は確実に無謀だ。何の策もなしにトラックに突っ込むとかアホか。アホなのか。どこかにアホ毛でもあるのか？」

「……………」

少年に頭の天辺をつんつんと突かれ、更に身体を小さくするのでは。

「とういかな？ 昼間と言えど一人でうろつくのは関心しないな。世の中には少女趣味な人だっているんだし、下手したら誘拐とかされるぞ？」

少年がそこまで言った時。

『なっ、ちよ！ 離しなさいよ！』

『きゃっ！ むぐー！』

『るせえ！ 大人しくしてろ！』

『さっさと車に乗せるぞ！』

……簡単に説明すると、

歩道を歩いていた少女二人が真っ黒なワンボックスカーから出てきたヤのつきそうな人達に拉致されどこかへ連れて行かれました

「……………」

「……………」

なのはと少年が顔を見合わせ、それから少年が口を開く。

「なのはは今すぐ警察に連絡。ほらダッシュダッシュ！ 急ぎなんしー！」

「はっ、はい！ あなたは……………」

「ん、ちょっと生意気なモブキャラシメてくる」

なのはが公園から走り去っていくのを少年は見届けた後、

「……ようし。久々に暴れてやるか。何秒持ってくれるかねえ……
クケケ」

この上なく邪悪な顔で、そう呟いた。

誰も使わなくなった港の、大きな倉庫の中の一つ。

そこに誘拐犯と誘拐された二人がいた。

誘拐犯は全部で六人。二人が外を見張り、四人で中を固めている。

皆それぞれに拳銃やサブマシンガンなど物々しい武器を持っており、少女二人は縄で縛られているため、どうやっても脱出は不可能と言える。

誘拐犯達は無線でそれぞれ連絡を取り合っており、異変が起きれば即座に誘拐犯達に気づかれる。彼らに隙はほとんど無いといえるだろう。

……もちろん、相手が『一般人なら』の話だが。

倉庫の中で身代金は幾らにしようかと考えていた誘拐犯のリーダーに別の誘拐犯から連絡が入る。

『外からの連絡が無い。やられた可能性があるがどうする？』

「何……？」

外からの連絡が無いという事は……無線を潰されたか、あるいはその持ち主ごとやられたか。

どちらにせよ穏やかな話ではない。

「一人様子見に行かせる。何かあれば即座に連絡するように」

『了か ザザ、ザ……』

「……？ どうした」

『わからない……ザザ……な、何だおま……ザー』

無線に不自然なノイズが走り、リーダーが不審に思ったその時だった。

『ぎゃあ……ザザ……！？』

「どうした！ おい！ 返事をしろ！」

『ザザザ……ザー……』

「くそっ！ やられた！」

無線の一つから男の悲鳴が微かに聞こえ、それ以降その無線から連絡が入る事は無かった。

何が起きた……？ とリーダーが呟く。

そうこうしている間にも次々と連絡の来る無線が減って行き、いよいよ残った最後の一人からも来なくなっていた。

「誰だ……？ 一体誰がやった！？」

リーダーがポケットから拳銃を抜き出した。

一体誰が何をしたかは分からないが、仲間の無念は俺が果たして

やる、と。

『ザザ……あー、あー……聞こえるか？』

「!? 誰だ!」

その時、最初に途絶えた無線から声が入る。

仲間の誰の声でもない、低いような高いようなよく分からない声だ。

『えー、誘拐犯さん？ で合ってる？ 悪いけどあなたの仲間は全員気絶させてもらったよ。連絡が入ってこないのは既に知っているだろうけど一応ね』

「なっ……!!」

『という訳でね？ 今からアンタの所へ行こうと思うんだけどさ。ここで問題。俺はアンタから見えてどこから来るでしょうか？ 一、上から来るぞ！ 気をつける！ 二、実は右でした。残念！ 三、実はこの無線はエイプリルフル企画の一端で、俺はどこからも来ない。さてどれだ？』

「この野郎……ナメやがって!!」

リーダーが乱暴に無線機を壁に向かって投げつけ、誘拐された少女のうち大人しそうな方を乱暴に掴み頭に拳銃の銃口を向ける。

「おい！ テメエ!! 聞こえてんだろ!? コイツがどうなってもいいんなら来いよ。テメエが何かする前にコイツの頭はスクラッ

プになるだろうがなあ!!」

『……あらら。無回答ですか。それでは答えをお教えしましょうかね』

「へっ、何言ってる」

男の声が、不自然に途切れた。

理由は至ってシンプルだ。

男の足元から、髪の毛の長い少年が突然現れ顎にアップパーカッツを食らわせたためだ。

「正解は下からでした。不正解だったあなたは残念ながらボツシュートです」

少年の拳を食らって五メートルほど宙に浮いているリーダーのさらに少し上へ少年が跳び、

「だあらっしやあああああああ!!」

リーダーの脳天に強烈なかかと落としを食らわせた。

リーダーは一瞬音を置き去りにするスピードで空を急降下し、コンクリで出来た地面へ頭から突っ込んでいった。

使われなくなってから積もっていた埃が舞う。

そしてそれは、少年が地面に降り立つと同時に、少年から逃げるよ

うに吹き飛んでいった。

「……よし。いやーいい汗かいたわー」

額を手で拭いながらイイ笑顔をする少年だが、汗など一つもかいていない。

「っとと。大丈夫かお嬢さん方」

少女たちを縛っている縄を少年がほどこうとして、再び硬直。

そして、つい先ほどと同じように冷や汗がダラダラダラと流れる。

(……あつるえーおかしいなー何でこつも主要キャラと出会っっちゃうのかなーH A H A H A こういったイベントってのは主人公にあるべきでしょ？ そうでしょ要ほら早く来て早く早くハリーハリーハリー！)

「あの……」

「ひでぶー!？」

「ひゃっ!？」

少年にとってはデジャヴと思えるようなシーン。

「えと、ありがとうございました!」

二人のうち大人しそうな印象を与える少女が少年に頭を下げる。

高飛車そんな　　といつかもつぶつちやけていいよね。シンデレラ
しそうな少女はっーんとしているが。

「……ふん」

「ほっ、ほらアリサも！」

「……助けてくれて、どうもありがとう」

やけに棒読みチックな口調でアリサと呼ばれた少女が少年に礼を
言う。

「お、おお……これがリアルくぎゅ！　パねえです！　マジパねえ
です先輩！」

「は？」

「いや何でもない。アレだ。今後気をつけるように」

「忠告どうも。行く、すずか」

「あ、待ってよアリサちゃん！」

素っ気無い態度でアリサがスタスタと歩き去り、すずかと呼ばれた少女がもう一度少年に頭を下げてからアリサの後を追うように去っていった。

少年はそれをにこやかな笑顔で見送っていた訳だが内心では、

(リアルくぎゅ k t k r！　あ、でも本当は会っちゃいけないんだ

よな何してんの俺ちょっと誰かタイムマシンくれない？ 今すぐ
少し前に俺に会ってフルボッコするから。てか何で出会っちゃうか
なフラグ？ フラグなのこれ？ え、何の？)

色々混乱していた。本日二回目である。

「……ただいまやー」

『ああ、君か。所で翠屋のケーキは一体どうしたんだい？』

「あ」

この日、少年にとってはある意味地獄のような日だっただろう。

第3話〜未確認少年地に降り立つ〜（後書き）

？「俺と」

私の！

『ずっと俺のターン！ のこおなああー！』

遅れを取り戻すかのようにズバズバ更新してしまいました。おかげでネタ切れです。

？「ならさつさと原作知識を補充しに行くんだな」

おや？ あ、アレはまさか伝説のダブルミリオン達成動画！？
これは見なくては！

？「オイコラ待てやコラ」

第4話〜闇の書覚醒の手助け〜（前書き）

あれ？ よく考えたら蒐集ってはやてが倒れた後にやるんじゃないかな？
かっ たっ け？

……うわーい色々おかしくなっ たーあはははははは

しこてえ。

第4話 闇の書覚醒の手助け

「……」

家の主がいない家にシグナムが佇んでいた。

目の前にあるのは少し大きめの辞書のようなもの。

「……」

シグナムが、おもむろに懐から血が乾いてこびりついたリンカーコアを取り出す。

闇の書にでも食わせればいいだろう

あの時少年の放った言葉が頭の中でループする。

シグナムの目の前にある辞書　　いや、闇の書。

彼女たちヴォルケンリッターが生み出された原点であり、同時に現在の主である八神はやてを苦しめるもの。

「……ッ」

闇の書を睨みながらシグナムがギリリと歯ぎしりする。

本来、闇の書には所有者を苦しめる設定などなかった。

……が、所有者が変わる度少しずつプログラムが変わり　　最終的にはバグが発生、持ち主を苦しめる拷問道具のようになってしまった。

主は今頃シャマルに連れられ図書館で本を読んでいるだろう。だが、最近日課のようになってきたそれもいずれは出来なくなってしまう。闇の書の呪いだ。

下半身から徐々に上へと身体が痺れて行き、心臓にそれが達すればその時点で命という蠟燭は簡単に消えるだろう。

闇の書のバグを取り除けば自分の主は最悪の結末を迎える事はない。

そしてバグを取り除くには　　闇の書を覚醒させるしか方法はない。

六百六十六ページ全てを魔力で満たした時、その瞬間は訪れる。

「……」

現在魔力で満たされたページ数は　　二百二十七ページ。

覚醒には、程遠い。

闇の書にでも食べさせればいいだろう

少年の言葉がループする。

手に持った血まみれのリンカーコアは魔力の塊、いや、これをもつ人の魔力の源だ。これを闇の書に与えれば少しは足しになるだろう。

リンカーコアを持った手を闇の書へと伸ばす。

そしてリンカーコアが闇の書のページに触れ、そして沈んでいった。

リンカーコアが全て闇の書に呑み込まれ、一瞬本が光る。

満たされたページ数は　　。

「なっ……!!? 三百だと!?!」

三百。少年の持っていたこのリンカーコアの持ち主は、一体どれ程の魔力を持っていたのだろうか？

想像すら出来ない。

シグナムが埋まったページ数に驚愕している時、

「……どうだ、少しは役に立ったか」

シグナムが勢いよく声の聞こえた方へ顔を向ける。

そこにいたのは、件の少年 神楽要。

一体いつから、いや、いつの間に家へ入ってきたのだろうか？

いくら闇の書に集中していたとはいえ、シグナムだって一人の騎

士だ。常人とは違う。気配を感じ取るくらいなら簡単に出来る人物だ。

そんな彼女が気配を察知出来なかった。

「……あまり警戒して殺気を撒き散らさないで欲しい。首元がチリチリする」

「……本当に貴様は何者なんだ？ 私に気配を察知されずに背後へ近づくな……」

「……それなりに修羅場を潜り抜けてきたただの平均的な人間だ」

彼の言う修羅場は一体どれ程のものなのか。シグナムにはそれが分からなかったが、少なくとも一般人の言うそれとは違う事は明らかだ。

「……それで、後何ページなんだ？」

要が問いかける。

だが、シグナムがそれに疑問を覚えた。

一度も闇の書を見せた事など無いのに、この少年は何故それを知っている？

「……」

警戒心をあらわにするシグナムに対し要は常に自然体でいる。

「……今日も蒐集か」

「誰から情報を手に入れた？」

「……独自だ。管理局にハッキングした。勿論形跡は残していない」

「要はさらつと言ったが、実際この『管理局』というものにハッキングを仕掛けるなど普通の人間の考えではない。」

「……俺に何か出来る事があれば手伝おう。魔法生物の討伐なら任せろ」

「……何故貴様はそこまで私たちに干渉する？」

「シグナムのもっともな質問に対し、要は軽い口調で答えた。」

「……簡単な話だ。困っている人は放っておけない性質なだけだ」

で。

シグナムと要の二人が管理外世界と呼ばれる世界で、巨大な竜と対峙していた。

燃えるような赤色の鱗で身を包んだ竜だ。全長は五十メートルほどと言った所か。

シグナムが己の武器であるレーヴァティンを構えようとした所で要が横からストップをかける。

「……俺にやらせてくれないか。実力を見せるにはいい相手だろう」

「分かった」

要の要望にシグナムが承諾し邪魔にならないよう後ろへ下がる。

「……竜か」

少年がそう呟き いつの間にか右手に持っていた大剣を肩で担ぐ。

いつの間に取り出したのかシグナムには全く分からなかった。

その大剣は、何とも歪な形をしていた。

ある部分は斧のように分厚い刃をしており、

ある部分は剃刀のように薄い刃をしており、

ある部分は缶切り状のスパイクがあり、

ある部分には糸鋸状のワイヤーが取り付けられ、

ある部分は巨大な鋸のようになっており、

ある部分はフック状のスパイクになっており、

ある部分は接近戦用のスパイクがあった。

およそ剣としては機能していないような外見だが、それでも立派な剣の一つだ。

「……………『聖剣アスカロン』。悪竜を切り殺すために作られた剣だぞうだ。最もそんなものは存在しないが」

大剣の剣先を真つ赤な竜に向けながら要が呟く。

「……………まあ、相手が竜だしこれでいいだろう」

紅蓮の竜が首から上を仰け反らせ、口元から炎を零しながら中に

炎を溜め込む。

プレスだ。

竜が限界まで口中で溜めた炎を、要たちのいる所へ向けて放つ。

摂氏四千度を軽く超える炎の濁流が二人を呑み込もうとするが、シグナムは事前に回避。要に至っては既にそこにはいなかった。

竜がグルル、と喉を鳴らしながら消えた要を探す。

だが、竜が要の姿を見つける事は出来なかった。

竜は地上を見ていた。

そこで見つけられなかった、と言う事は？

「……チェックメイトだ」

竜がそれに気づき頭を上へ向けるが、もう遅い。

太陽の光を背に浴びながら、大剣を竜めがけて振り下ろす要がいた。

「5ページか」

「……しけているな」

「いや、これが普通だが……」

ちて。

先ほど思いつきり大剣を振りかぶっていた要だが、別に竜を殺し

たわけではない。

竜の頭に大剣が触れる直前　　剣の側面が竜に当たるように捻り、そのまま固い部分をぶち当てたのだ。峰打ちというにはかなり荒っぽい方法をしている。

「用は済んだ。そろそろ帰らないと主も心配するだろう」

「……そうだな。夕食が楽しみだ」

「既に要は夕食を食べる前提なのか……？」

そんな二人の前に、突如光が溢れ出す。

「何だ!？」

シグナムが驚きの声を上げる。

光の正体は、転送魔法。

つまり、誰かが転送されてきたという事だ。

そして光が徐々に薄まり、中にいた誰かが姿を現す。

「そこまでだ!　管理外世界で許可無く魔法を使用した　」

転送魔法で送られてきた誰かが言葉を最後まで発する事は無かった。

どこからか指を鳴らしたような乾いた音がしたかと思うと、送ら

れてきた誰か まだ幼い少年 の動きが止まっていたのだ。

いや、少年だけではない。

世界そのものが、時間を止めている。

「……」

動かなくなつた少年とシグナムを一度見やり、自分だけ影響を受けていない事に特に驚きもしない要。

とそこへ、

「いよう愛しのバカ息子。元気でやってるか？」

髪の毛の長い少年が空から降りてきた。

少年は音も無く地面に着地し、要にそう声をかける。

「全く……『霊装』使つんなら結界ぐらいは張れつつたのにまーまーよくも破ってくれやがりましたな。おかげでこのKY君に見つかったじゃねえかバーロー」

「……これは親父がやったのか」

「いんや違う人。流石に世界の時止めるとか無理。俺そんなチートじゃねえし」

はあ、とため息をつきながら少年が答える。

「つとと、そろそろ時間切れだよ。今日は送ってやるから次はしくじんなよアホ息子」

「……そうか。なら次も結界はなしで使おう」

「ねえ人の話聞いてた？ ねえ聞いてた？」

髪の毛の長い少年が指を鳴らす。

「まあいいや。ま、頑張ってくれよ」

瞬間、要の視界がぶれ、歪み、気持ち悪さに思わず目を瞑り、開けた時にははやての家が目の前にあった。

「……」

首を捻れば、隣にシグナムもいる。

そして、止まった時が動き出す。

「む……？ おかしいな、確か私は先ほどまで……」

シグナムが動き出した直後、いつの間にか景色が変わっている事に疑問を抱きつつも、

「まあ、いいか……」

と自分で納得し、はやてに帰宅の意を告げてから家へと入っていた。

帰った。

もちろん、要も一緒に入り、ちゃっかり夕食を頂いてから

ちなみに今日はハンバーグだった。

第4話〜闇の書覚醒の手助け〜（後書き）

？「俺と」

……しにてえ……。

『ずっと作者のターン！ のこおなあー！』

？「何だまだ小さなミスでぐだぐだ言ってるのか」

だって、ねえ？ 下手すりゃ原作崩壊よ？

？「俺がいる時点で既に崩壊してるっしょ」

いやだってあんたあんま関わってないやん。

？「まあそうなるように動いてるからな」

さて。今回要君が使用した剣。

？「『聖剣アスカロン』だっけか」

そう。ちなみに私後方のアックアは個人的に好きです。

？「分からない奴はインデックス読んでみてくれ。意外といいキャラしてるぞ」

さりげなく宣伝した所で今回は失礼します。それでは。

？「帝王に逃走は無いだ！」

第5話「安心と信頼の模擬戦タイム」(前書き)

……うん。言い訳はあとがきで。

第5話　安心と信頼の模擬戦タイム

チュンチュン、と外で雀が鳴く中、要は和風な畳の上
にはその上に敷かれていた布団　　から身を起こす。　　正式

この一文で異変に気がついた人はいるだろうか？

「……」

「……」つおせらいを試してみよう。

要は本来自分の家を持っておらず、木の上で眠っている。

ならばこの畳と布団は一体どこから来たのだろうか？

……まあ、答えは簡単だ。

「……シグナムめ……」

ほんの数日前までは要はしっかりと木の上で寝て過ごしていた。

ところがどこからか嗅ぎつけたのかシグナムがひょっこりと現れ、
要が木の上で寝ている事を確認した後はやてにそれを報告。

要は外見から見てもまだ幼い少年だ。木の上で寝ているなんて知ればはやてがどう行動するかは周知の事だろう。

まあつまり。ここははやての家だ。

「起きたか要」

とりあえず布団を片付けようとした要の元へ全ての元凶のシグナムが登場。

「暖かい布団は寝心地良かったか？」

「……俺は下が硬い方がよく寝れるんだが。主に木の上とか」

「それは失礼したな」

言葉では謝っているが小さく笑っている辺り、シグナムに反省の色は見えない。

「顔でも洗ってくるといい。主が朝食を用意しているぞ」

「……そうか」

布団を丁寧にたたみ、端っこへ寄せながら要が呟く。

ちなみに現在はキリツとしているシグナムだが、数十分前
詳しく言えば寝起き　の時はおよそ騎士とは思えないようなだ
らけっぶりだったりするが、そこは割愛。

朝食を済ませ、皆がそれぞれくつろいでいる時の事だ。

要は特にする事もなく縁側で胡坐をかいてぼーっと雀の数を数えていると、背後からシグナムが声をかける。

「要」

「……何だ？」

「私と少し打ち合いを」だが断る「即答しなくてもいいじゃないか」

要の返答はあらかじめ予測していたのか、タイムラグが無かった。

「どうも要の動きを見てから身体がうずうずするんだ。戦いたいと」

「……戦闘狂め」

「何とでも言ってくれ。それでどうする？」

「……どうせ断つても斬りかかってくるんだらう？」

「私を外道と勘違いしていないか？」

どこにあったのかは知らないが、シグナムは手に持っている二本の木刀のうち一本を要に手渡す。

これは受け取ったら模擬戦やってもいいよ、という合図になるの

だろうか。要は少し考えるが、やがてその木刀を受け取った。

そんなこんなでここははやての広すぎる家の一角。早い話が空き空間。

要とシグナムが十分な木刀を両手で持ち正眼で構え対峙している。

「……………」

「……………」

二人の間には十メートルくらいの距離が空いている。

「二人とも頑張つてやー」

観戦者ははやて、シャマルの二人。残りの守護騎士達は現在ペー
ジ集め中である。

はやては二人を、シャマルは声だけシグナムで心は要に傾いてい
る様子。

『あ、覚えとけよ。シャマルはシヨタコンって説あるからさ、下手
したら貞操とられるかもよー』

要が親父と呼ぶ少年の言葉を思い出し、若干身体を震わせる要で
あった。

「……………何故観戦者がいる」

頭によぎった不穏な考えを散らすようにシグナムに質問する。

「いや、気がついたらいたんだ」

「……………」

内心ため息を吐きながら要は武器を持ち直す。

四人から会話がなくなり、穏やかな風が吹く音のみが空間を支配
する。

やがて、その風に運ばれてきた一枚の葉っぱがひらひらと地面に向かって舞い落ち、

同時に二人が動き出す。

「ッ！」

「……」

シグナムが、要が、それぞれの敵がいる方へ一直線に走り同時に木刀を振るう。

ガキイ！ と音を立て二本の木刀がぶつかり合い硬直する。

木刀を互いにすり合わせたまま動かなくなる二人。

先に動いたのは要だ。

自由な下半身のバネを使ってその場でぐるりと一回転するように足を振り上げ二本の木刀を空高く打ち上げる。

「ほっ………！」

シグナムが感心したように小さく息を漏らし、即座に両手を顔の前でクロスし、直後、鋭く打ち込まれた要の右ストレートを受け止める。

要の腰の入った重い一撃はシグナムを僅かに後退させる。

「今度はこちらから行かせて貰うぞッ！」

「……ッ」

空中を舞っていた木刀が自由落下をしながら二人の手元へと戻り、即座にシグナムが素早いフットワークで要の懐へ潜り込み木刀で鋭い突きを繰り出す。

要は手に持った木刀を斜めに構えてそれを受け流し、自分の領域に入り込んできたシグナムの左腕に木刀を強く打ちつける。

「ッ！ やるな……！！！」

追撃が来ると予想しシグナムが咄嗟にバックステップで距離をとる。案の定シグナムの身体があつた場所には木刀が縦に両断するように振り下ろされていた。

左腕の鈍い痛みを無視し、両手で再び正眼の構えを取るシグナム。

「どうやら、私の目に狂いはなかったようだ」

「……俺としてはあまり嬉しくはないがな」

「？ どうしてだ？」

「……シグナムみたいな奴に試合を申し込まれるからだ」

言葉とともに要がシグナムの視界からブレる。

「……丁度、こんな風に」

声がしたのは、シグナムの背後 死角。

「ッ!？」

シグナムがいつの間にも後ろをとられていた事に驚きつつも、身を捻ってその勢いで木刀を横に振るが、既にそこに要はいない。

「どこに……ッ!？」

左右を軽く見回すがどこにも要の姿はない。

なら、ほかに考えられる所は？

「上か!！」

「……雷注意報だ」

太陽を背に木刀を下にし勢いよくシグナムめがけて落下する要。

シグナムが防御のために横に構えた木刀と、上空から雷のように落ちる木刀がぶつかり、原因不明の火花を散らす。

「ぐう……ッ!」

上空から勢いをつけ、そこに子供とはいえ全体重をプラスした一撃はとても重い。

「……第二陣、投下」

「何!？」

唐突に要がポツリと眩き、シグナムがそれを理解しようとした直後。

「……上から来るぞ、気をつける」

棒読みのような声が『空高く』から聞こえる。

「なあッ……!？」

シグナムは、この光景が納得出来ないように声を上げかける。

何せ、要がもう一人いるから。

「くッ!！」

二人目の要を視認したシグナムは木刀を強く振り一人目の要を遠くへ吹き飛ばす。

再び防御の構えをとった直後、二度目の重い攻撃がシグナムへ突き刺さる。

先ほど木刀を打ち付けられた左腕がさらに痛みを増し、木刀のバランスがやや斜めに傾く。

それが結果的に要の攻撃を逸らし、支えを失った要の身体が空中でぐらつく。

それを好機と見たシグナムが先ほどのお返しとばかりに木刀を横

雑ぎに振るい要を吹き飛ばし、遠くへ飛んでいった要を追撃しようとして、

「……チエックメイト」

首元に木刀を突きつけられ、動きが止まった。

「……分身は卑怯だと思っただが」

「……勝てば官軍」

シグナムがため息をつきながら木刀を遠くへ放り、両手を上げて降参のポーズをとる。

一人目の要がそれを確認しシグナムに突きつけていた木刀を遠くへ軽く投げる。

「というか、さっきの分身は一体何だったんだ？」

「……質量のある残像」

縁側で二人を見ていたはやてが『マーク？がここにおる！？』とよく分からないツッコミをした。

第5話く安心と信頼の模擬戦タイムく（後書き）

？「よし、死より苦しい拷問と死んだほうがマシだと思っ虐待、どつちがいい？」

まあ落ち着いてくれ。だからそんな物騒なアイアンメイデンだの五寸釘だのはしまつてね。

？「一応更新が遅れた理由だけは聞いておこうか」

……実は生放送つてのが、

？「指に五寸釘を所望か」

落ち着け！お前はいつからひぐらしの世界に入った！？

いや、まあ、そういう事です。別にやってるわけではないですよ？見る専門です。

？「威張つて言うほどでもないな」

少し前にマインクラフトってゲームの動画見てた、って言いましてたっけ。あれの生放送見てたんですよはい。

？「原作知識の補充は？」

一度もしてません。

？「両手だけじゃなくて両足にも五寸釘がほしいと申すか。いやし

んぼめ
「

そんな両手いっぱい
に五寸釘を持ちながら
邪悪な笑みで近づかな
いで！

第6話〜要の日常〜

シグナム、ヴィータ、シャマルの三人が蒐集のために出かけた。

よって現在はやての家にいるのは家主であるはやてと忘れられかけている守護騎士、ザフィーラと居候のような扱いの要だけである。

「むじゅ……暇やー」

はやてが呟きながら小さくあくびをする。昨日少し夜更かしをし

たせいだ。

はやては近くにおいてあったリモコンでテレビの電源を入れ、適当にチャンネルを回すが、朝の時間帯はおよそ子供向けな番組はどこでもやっていなかった。

「かぁーなぁーめえーくうーん」

「……何だ」

テレビの電源を切り、今度は要に話しかける。

「暇や」

「……車椅子でどれだけスピードが出せるか試してみたらどうだ」

「いやそれ前にやったんや」

「……ちなみに速度は？」

「測ってないから分からへんけど……自転車に乗ったサラリーマンが驚くくらいの速さや」

はやては誇らしげに『無い胸』を張る。

要はその貧相な部分を一瞬見てからはやてに話しかける。

「……はやて。実は胸はマッサージしても大きくならないうって知ってたか？」

「うなあつ！？ な、にやぜそれを……！？」

「……時々声が」

「わーわーわー！！」

はやてが顔を真っ赤にして怒鳴り、要がさらに追い討ちをかけた。

「……大丈夫。胸が小さくても需要はある」

「ひっ、貧乳はステータスや！ 希少価値なんや！」

「……そう思っていた時期が私にもありました、と」

「うっ……」

要に止めを刺され、がっくりと肩を落とすはやてであった。

その後帰ってきたシグナム達が何となく自分たちの主に元気が無い事が気になり理由を聞いた直後、全員が全員要に襲い掛かったというのは余談。ちなみに全員返り討ちにした。

次の日の昼近くの事。

要は特にする事も無く、縁側に座りぼーっとしていた。

普段から感情を表に出さないせいとか、その姿は完全に抜け殻のようにも見え、何か近寄りがたいオーラをかもし出していたりする。

そんな要は空の雲の形がアレに似てるだの雀が鳴いてるなーだのあ、食われただのと子供らしい事をしていたりする。それほどまでに暇。

蒐集の手伝いをしようとすれば、シグナムに主の護衛を頼みますと断られ。

ザフィーラの毛を堪能しようかなと思えば危険を察知したザフィーラがいつもの場所にいなかったり。

「……」

結果、暇。

はやてもこんな気持ちで昨日話しかけてきたのだろうか、とぼんやり考える要。

そこへ後ろからはやてが車椅子を動かしながら近づく。

「要君暇なんか？」

「……考える事を放棄するくらいには暇だ」

「……もの凄く暇って事やね」

「……そうだな」

会話が途切れ、沈黙が空間を支配する。

「……要君」

「……どうした」

「私な、最近夢を見るんや」

はやてがやけに落ち着いた声音で話す。

「真つ白な病院の中で、清潔なシーツの中で、皆に見送られながら……私が死ぬって夢や」

「……リアルな夢だな」

「そうやね。夢の中の私は身体を動かさなくて、でも言葉だけは話せてな。最後に皆にこう言うんや。『今までありがとう』って」

要が思わずはやての方を向く。

はやての顔は、全てを悟ったかのような、とても大人びた印象を与えていた。

「……なあ、要君」

「……どうした」

「私、死ぬんかな」

「……」

要は答えられなかった。

「最初はただ真っ白な夢だったんや。それが徐々に鮮明に、霧が晴れるように変わっていった。最近はずき言ったとおりなんや」

車椅子を動かし、要の隣にはやてが来る。

「……私、どうしたらいいんやろうな」

「……安心すればいいと思う。はやてを助けるために俺がいる。シグナム達がいる。だから安心して、そんな夢を二度と見ないくらい楽しい事をすればいいと思う」

「……そ、つか」

言葉と同時にはやてが要の方へ倒れこむようにして車椅子から滑り落ちる。

要は特に驚く事も無く、はやてを優しく受け止める。

両手で包んだはやての身体は、震えていた。

それは夢が現実になる事への恐れか、要の言葉に感動したのか。

「……泣きたい時は泣けばいい。小さいけど泣くための肩はここに
ある。いつでも使ってくれ」

要は、声を押し殺して泣きじゃくるはやての背中を優しくさすった。

「……なんだかなあ」

そんな二人の様子を空高くで見守っていた髪の毛の長い少年が、小さくため息を漏らす。

『うん？ どうした？』

少年と背中合わせにして座っていた神が問いかける。

「何で俺はここにいるんだろうな……」

『助けに行けばいいじゃないか』

「出来たらもうやってるよ」

神はそこで少年の方を向き、ふと下を見ると、少年の手が真っ赤に染まっている事に気づいた。

恐らく、爪が食い込むほどに強く握り締めているのだろう。若干震えている。

「自分で勝手にルール決めてさ。こっやって見てるくらいしか出来ない。あそこで小さな女の子が震えてるってのにさ」

神からは少年の顔が見えないので表情は分からないが、何となくどうい感情が渦巻いているかは分かった。

怒り。何も出来ない自分に対しての、強い怒りだ。

『……そのために、君はあの少年をあの子の元へ行かせたんだろう？』

「まあ、そうだな」

言葉は軽いが、その奥に秘められている感情はとても重い。

砂の入った袋のように。

「……ッ」

少年の掌から流れる血が、さらに多くなった。

あまりにも強く握りすぎて、拳が白くなっていた。

少年が僅かに、天を仰ぐように顔を上に上げ、誰にも聞こえない程の声で小さく呟いた。

「……憎らしくて殺したくなるぜ俺。全く」

第6話〜要の日常〜（後書き）

？「俺と」

私の！

『ずっと作者のたーん！ のこおなああー！』

いきなりですが灰音様、感想ありがとうございます！ 書いた直後に来るもんですから毎回ドキドキもんですよ。

？「よくもまあこんな駄文に時間を割いてくれてなあ……感謝だぜ」

駄文なのは認める。これから良くしていけばいい。

？「ま、頑張れよ」

言われずとも。

第7話　魔法少女との邂逅

「……………」

平和というのは行き過ぎればただ単に暇なだけだな、と要は思った。

もはや定位置となりつつある縁側に胡坐をかいて座り、魂が抜けた後の抜け殻のような顔でぼーっと空を見上げる。……あ、飛行機雲。と呟く要。

「……？」

『暇すぎて死ぬ』という言葉が現実になるほどの暇を持って余していた要だが、ふと何かに反応し片眉を僅かに動かす。

「……これは、魔力か？」

誰のかは知らないが、魔力の規模からしてこれは結界だろうかと要は推測する。しかも距離的には結構近く、歩いていける場所から反応がある。

「……」

これは確認しに行くべきか、いやでもシグナムにはやてを見てるように言われたしどうしようか、としばし葛藤を繰り返す要だが。

「……はやて」

「うん？ なんや？」

「……暇過ぎで死ぬのは嫌だから散歩に行つて来る」

「そ、そか。晩御飯までには帰つてきいやー」

要のやや行き過ぎてる気がしなくもない言動にやや引きつつもはやては出かける要の後姿を見送った。

「……暇すぎて死ぬかもしれないのは私も一緒なんやけどなあ……」

はやてのそんな呟きは、誰にも聞かれることは無かった。

要の予想通り、魔力の正体は結界だった。

本来、結界とは外の世界から結界の中を隔絶するために張ったり、中にあるものを他人に見られたくない時などに張ったりする。この場合は前者か、後者か。

「……………」

要はそんなそびえたつ結界に片手をそっと押し当てる。

触れただけの掌は、泥の中に沈めるようにずぶずぶと結界の中へと突き刺さっていく。

やがて全身をその結界の奥へと押しやり、結界という壁を抜けてその先に出る。

広がった光景は、戦場。

突然だが、守護騎士の一人であるヴィータは要の事を快く思っていない。

何故か？

別に髪の色が同じだからとかそんな些細なことではない。むしろ要のほうが色は濃い。

……話を戻すとして。

ヴィータが要の事を嫌いな理由なんてのは彼女からすれば色々があるが、それら全てを簡単簡潔にまとめれば。

主こと八神はやたと仲良くしてるからである。

この嫉妬の感情ともたれない『何か』が、ヴィータを激しくイラつかせるのだ。

自分達守護騎士は本来、主を守るための……盾とも呼べなくも無いが、立ち位置としてはそんな所だ。主従関係のせいでも上手にはやたと接触できなかつたりする。

そして、要アイツはそんな壁のある関係ではない。

要自身どう思っているかは知らないが、少なくとも主である八神はやては彼の事を友達としてみている。

自分と対等な関係。

ふざけあって、バカやって、それでいて笑い合えるような。

そんな関係。

彼女達守護騎士にとって、はやては王のような存在だ。関係が釣り合うはずがない。

……もっとも、はやて自身そんな事はこれっぽっちも思っぢゃないが。

要がふらりと現れてから、どうも自分達の存在が薄くなった気がする。

これもヴィータの勘違いだったりするが、女の子の勘違いとは常に加速し続けるものだ。

要と主はやてがどんどん仲良くなったら私達はどうなる？

そついえばシグナムが要の事を褒めていた気がする。私と同等かそれ以上の力を持つとかどうたらこうたら。

自分が一番弱いみたじゃないか。

弱い奴ほどいらぬ者はいない。

なら、自分だって出来ることを証明すればいい。

そして守護騎士の一人、『鉄槌のヴィータ』は。

目の前を偶然通りかかっただけの魔導士の少女に襲い掛かった。

「……………」

結界を抜けた先は戦場のような光景だった。

あちこちのビルは重たい物で殴られたように抉られ、中には鋭い刃物のようなもので切り刻まれたものもあった。

要は状況確認をするようにあたりを見回す。

上空。グイータと金髪の少女がそれぞれの獲物を振りかざして戦闘中。

正面。栗毛の少女と何となく見ててイラツとする少年が一人。少女の方は怪我をしてるらしくその場から動かない。

「……どちらを攻めるか？」

栗毛の少女と少年の方はこちらに気づいていない。どうやら上空の戦闘を気にしているせいで注意がこちらにまで行き渡っていないのだろう。

「……なら、やる事は一つか」

要は一直線に、最短距離でそこにつくように走り出した。

「チツ……!!」

「やあああああ!!」

空では激闘が繰り広げられていた。

金髪の少女が鎌のように変化したデバイスをヴィータに向かって振り下ろし、ヴィータは己の獲物であるグラーファイゼンというハンマーに近い形のデバイスを使ってそれを弾く。

最初は栗毛の少女もこの戦闘に参加していたのだが、ヴィータの攻撃を食らい怪我をしたので戦線離脱。今は金髪の少女とタイマンとなっている。

「食らえ!!」

「ッ!!」

天から叩き潰すようなヴィータの一撃を金髪の少女が鎌の刃の部

重たい武器をやや引きずるようにして空を一直線に駆け、必殺の距離でグラーファイゼンを少女の頭めがけて振り下ろす。

(これで、)

少女も防御のために鎌状のデバイスを構えようとするが、彼女もまた疲労がピークに達している。思うように武器を動かさないでいた。

(終わりだ！)

『非殺傷設定』というものがなければ確実に少女の頭をおよそ全年齢対象ではお見せできないような事出来る必殺の武器を振り下ろす。

その時だった。

今まで無理をしていた結果が、ここにきてヴィータの身体を一気に蝕んだ。

ガクン、と身体が傾き、少女の頭に当たるはずだった一撃は外れ、少女の身体を地面に向かって吹き飛ばす程度で終わってしまった。

それでも十分な一撃だが、完全に『倒した』という確証は得られない結果となってしまった。

「ッ」

最後の一撃、と思っただけに行った攻撃は、結果失敗となる。

どうしようもない疲労感が身体に徐々に行き渡り、ヴィータの身体を、心を蝕む。

やっぱり、駄目なのかな

絶望的な考えが彼女の頭をよぎった。

身体が重力に従い固いコンクリートの地面へと落下する。

このまま落下していけば、動けなくなった所を先ほどの少女達に止めを刺される事は必至だ。それだけはどうしても避けたかったが、身体が言うことを聞かない。

最後に、自分の主であるはやての名を呼んだ。

要は空から落ちてくるヴィータを視認した直後、栗色の髪の少女へ向けて走っていた足を無理やりに動かし、倒れたビルを足で蹴って空を跳ぶ。

そして、疲労でとてつもなく重くなったヴィータを両手で抱えるようにして空中でキャッチ、近くのビルに音もなく着地する。

「……」

ヴィータが一瞬薄目を開き、何かを呟いたが、すぐに意識を手放してしまった。

(……シャマル、聞こえるか)

要は結界の中に入る際、チラツと結界の外に緑色の髪が見えたことを思い出し、その髪を持つ女性へ念話を飛ばす。

(この声は……要君？ どうしたの?)

(……お宅の守護騎士の一人が無茶をして倒れた。とりあえず魔力が欲しいなら怪我をした栗色の髪の女の子のリンカーコアを狙え。

……確か、直接そういったものに触る事が出来ただろう)

(『旅の鏡』ね。分かったわ!)

シヤマルとの念話を切り、こちらへ飛んできた金髪の少女の対応はどうしたものかと考える要。

「……………」

「あ、あの！ その子の関係者ですか!?!」

要が声をかけるより早く向こうから話かけてくる。

「……………関係者。まあ、そんな所か」

「その子について色々と聞きたいことがあります。一緒に来てくれませんか?」

「……………わざわざ敵の誘いに乗ると思ったのか」

「……………!」

要の声は酷く無機質で、感情というものをまるで感じられない。

この金髪の少女にとっては拒絶されたようにも感じるかもしれない。

「わ、私はただ話を聞きたいだけで!」

「……………返答は先ほどと同じだ。悪いが俺は今すぐこの子を連れて帰らないといけない」

「……そう、ですか」

少女は一瞬顔を暗くし、即座に両手で握り締めたデバイスを構える。

「なら、実力行使です！」

「……短気は嫌われるぞ」

ヴィータを近くの地面に優しく下ろし、周囲に札のようなものを適当にバラまいた後、改めて金髪の少女へ顔を向ける。

「……恨まないでくださいね」

「……はたしてその言葉はどちらが言うべきか」

両方が言葉を発した直後、金髪の少女が要に向かって最短距離で駆ける。

そのスピードは、まさに『雷』のような速さといえる。

だが。

「……『速いだけ』なら、なんら脅威はない」

「ッ！？」

稲妻のごとき速さで要の後ろへ回り込んだ少女だったが、要はそれに反応。素早く後ろを振り向き、デバイスを振り上げていた少女の無防備な腹へ固く握り締めた拳を突き出す。

腹部に強力な一撃を受けた少女がとてつもないスピードで空を飛び、背後にあったビルを二つほど貫いていった。

「……」

要は今小さな女の子を殴った拳を一度見据えてから

(……シャル、終わったか)

(今終わったわよ！ そっちはどう!?)

(……こちらも片付いた。今結界の外へ出る)

ヴィータの近くにバラまかれていた札を全て回収した後彼女を抱き起こし、先ほどの少女と同じくらいの速さで結界内を走り、あっという間に結界の端へとたどり着く要。

「……フッ！」

ヴィータを抱きかかえているせいであまり自由ではない右腕で、結界を思い切り殴りつける。

すると、殴られた箇所から放射状に亀裂が走り、ガラスの割れるような音と共に結界が消滅した。

要は近くにいたシャルと合流し、彼女達が追ってこないよう注意しながらはやて宅へと走っていった。

第7話 魔法少女との邂逅 (後書き)

……駄目だ、死ぬ。この量はマジで死ぬ。

今回はあとがきコーナーはなしでお願いします。

……あ、灰音様、もみじ様。感想ありがとうございます。励みに
なります。

第8話〈鉄槌のヴィータ〉（前書き）

ちなみに前話で要君がばら撒いた札っていうのは、ただの結界の
ようなものです。

別に某赤毛の神父さんみたいに火の魔神が出てきたりはしません
よ？

第8話〜鉄槌のヴィータ〜

ヴィータを抱えて帰宅した要。

要は家上がった後、迷うことなくリビングのソファにヴィータを寝かせ、自分は定位置の縁側に座り込んだ。

と、そこで後ろから蒐集から帰ってきたシグナムが声をかける。

「すまないな要。ヴィータが迷惑をかけたようで」

「……迷惑どころか助かったんじゃないか。おかげでページが何枚

か埋まったんだろっ?」

「蒐集の相手は魔法生物のみと私達で決めていたんだが……。ヴィータは少し短気だからな」

どうやらヴィータの行動はシグナム達の間ではルール違反だったらしい。シグナムがため息をつきながら要の隣に腰を降ろす。

「私達は守護騎士だ。騎士が人に手を上げるなど以ての外なんだが……」

「……その騎士の概念を無視してでも人を襲ったのは、それなりに理由があるんじゃないか?」

「そうだな……最近どうもピリピリしていた事は分かっていたんだが」

「……ページが集まらなくてイライラしていたんだろっ」

「いや、さすがにそこまで短気じゃないぞ?」

しばらくシグナムとそんな会話をしていた要だが、ふと背後に人の気配を感じて首を動かす。

要の背後に立っていたのはヴィータだ。いつの間に起きたのだろうか、と要が僅かに首を傾げるが、ヴィータの放つ殺気のようなものを感じ取り首を戻す。

「……おい」

ヴィータが口を開く。その声音はおよそ女の子の出すそれとは違い、やけに低い。

「何である時助けた？」

「……………」

「別にオマエの助けなんていらなかったのに……………何で」

「……………理由があるのか」

「当たり前だッ！！」

ヴィータが突然声を荒げ叫ぶ。

「オマエさえいなければ……………オマエさえいなければッ！！」

「……………意味が分からないが」

「アタシ一人でだって出来るんだ！ それを証明するために勝負を仕掛けたつてのに、何でオマエが助けに来るんだよ！」

要の隣に座っていたシグナムが僅かに怒気を放つが、要が手でそれを制す。

「……………あの時助けにいかなければ、お前自身どうなっていたかは自分で分かっていただろう」

「黙れ！！ そのすかしたような態度、すげえムカつくんだよ！」

今のヴィータの目つきは、人の目をしていない。

野性の本能に目覚めたような、獣のそれと同じような。

「よくよく思えばオマエが主と仲良くなってから全てが狂ったんだ……」

嵐の前の静けさ、という言葉を知っているだろうか。

嵐や竜巻、台風などの自然現象が起きる前というのは、不気味なほどに静かなものだ。

ヴィータから一瞬殺気が消えうせ、先ほどの倍近い濃密なものとなって再び彼女からあふれ出す。

「オマエが！ いなければ！」

ヴィータが巨大なハンマーのようなグラブファイゼンをバットのよう横にして構え、要の腹部に当たるように微調整し、今己の出せる限界の力でそれを要へぶつける。

「ああああああアアアアアッ！！」

「やめるヴィータ！！」

シグナムが制止しようとするが、行動が一瞬遅かった。

ヴィータの振り回した鈍器は吸い込まれるように要の腹へヒット。要の身体が一瞬宙を舞い、数メートル離れた位置にボテッと落ちた。

当たり所が悪かったのか、要はピクリとも動かない。

「ッ！！ お前は何て事を……！！」

シグナムがヴィータに激昂し掴みかかる。が、ヴィータが暴れて抵抗しうまく抑えられない。

「このッ……！！」

ヴィータを落ち着けるために平手でも打とうかと片手を振り上げるシグナムだが、

「 やめてくれ、シグナム」

不意に背後から、小さくか細い声がかげられる。

シグナムがそちらへ顔を向ければ、おぼつかない足取りで立ち上がろうとする要がいた。

「……俺が悪いらしいからな。シグナムは手を出さないでくれ」

「ッ！ だが……！！」

「……いいんだ。『自分の事は自分で片付ける』。親父から教えてもらった教訓だ」

よほど凄い位置に攻撃が当たったのだらう、今にも倒れそうだ。

だが、それでいて絶対に倒れることはない。

ヴィータ自身もこんな事になるとは予想していなかったのか、呆けた顔でこちらへ歩いてくる要を見つめている。

「……ヴィータ」

「ッ」

要が小さく名前を呼ぶと、ヴィータが僅かに肩をすくませる。

「……俺自身何が悪いかはわからないが、殴りたいなら殴ればいい。それで気が済むなら何発でももらってやる」

たった一撃でこの様だった要だ。本当に何発も先ほどのような一撃を食らえば確実に死ぬだろう。

それほどの覚悟で話しかける要に、ヴィータは恐怖感すら覚えた。

自分は一体何をしてしまったんだ？

疑問がぐるぐると駆け巡る。

「……殴って殴って、殴り疲れた時は、理由を説明して欲しい。……俺が生きていればの話だが」

今まで一切感情を表に出す事がなかった要が、口元だけが笑みを浮かべ、ヴィータの頭に小さな手をポンと置く。

「……こじじゃあ迷惑になりそうだから、せめて場所は変えてくれ……」

最後にその言葉を残し、ヴィータの横に糸の切れた人形のように
うつ伏せに崩れ落ちる要。

シグナムが倒れた要に呼びかけながらどこかへと運んでいった後
も、ヴィータはその場にずっと佇んだままだった。

第8話 鉄槌のヴィータ (後書き)

? 「息子がフルボッコされた泣きたい。俺と！」

最近寝不足な私の！

神「こつそり私だ」

『ずっと作者のたーん！ のこおなあー！』

? 「この小説じゃあ鉄槌のはヤンデレ設定なんだな」

ち、違う！ 違いますよ!? ちょっとシリアスっぽい設定にしようとしたらこうなっちゃったんです！ 不可抗力です！ ほかの小説では元気いっぱいなヴィータが見れますよ！

神「つまりこの小説のヴィータは暗い、と」

ま、まだ本気じゃないんだよ。この後は思いつき『うわあ……』
つてなるくらいはっちゃんけさせる系の予定があるんです。

? 「さり気に某メイン盾語を混ぜるあたり本当にいやらしい」

そうやってアンタが掘り下げるからここがおかしくなるんだよ。

? 「大体そうやってコツソリ混ぜた所でどうなるってよ。ただ単に知識不足を見せびらかすだけだろ？」

同じ趣味の人が集まりやすくなる。

？「汚いさすが作者きたない。これで俺はお前のことが嫌いになっ
たな」

作者が好きな人なんて早々いないでしょうに。

神「君達は本当に仲がいいな。見てて飽きないよ」

？「誰が！」

コイツと仲良しだっ
てえ！？

第9話〜入院生活の始まり〜

「……………」

気絶した要が次に目を覚ました時、そこは病院だった。

「……………」

白いシートに包まれながら頭上にハテナマークを浮かべながら首を傾げる要だったが、身体に鈍い痛みを感じて即座に把握する。

「……そろそろ鍛えた方がいい、か？」

腹部のやや上あたりに手を当てると、大きな痛みを感じ、同時に少し凹んでいる場所があることが分かった。どうやら折れているらしい。

「……これじゃあ非殺傷設定の意味がない気がするが」

非殺傷設定というのは魔法にだけつくものなのか、と要が僅かにため息を漏らす。

「目を覚ましたか、要」

二度寝でもしようかと要が考えた時、廊下へと続く扉の奥からシグナムが歩いてくる。

「肋骨が数本逝ったそうだ」

「……さっき触って確かめた」

「……痛くないのか？」

「……今度ヴィータから一発貰ってみるといい」

要はそこでふと自分に宛がわれた病室を見回す。

ベッドが一台しかない事から、どうやらここは個室らしい。

「……」

ふと、要の視線がシグナムの後ろ
細かく言えば病室の扉
に注がれる。

扉の奥から、真つ赤な髪が少しはみ出ている。

「いつまで隠れているつもりだ、ヴィータ？」

シグナムに名前を呼ばれた赤毛はビクンとその身を震わせた後、
観念したように扉の奥から全容を現す。

「……」

ひよこひよここと歩いてきたヴィータは、何となく居心地の悪そうな顔をしていた。

「要に何か言う事があったんじゃないか？」

シグナムに促すように言われ、ヴィータが顔を伏せる。

「……ゴメン」

そして要に向かつて、ガバツと頭を下げる。

「本当に、ごめんなさい！」

精一杯の謝礼。

身体に力を入れすぎているのか、ややヴィータの身体が震えたりする。

「あそこまでする気はなかったんだ……！ 自分でも、抑えられなくて……」

「……気にする事はない」

「でもッ！ オマエはアタシのせいで怪我をして……！」

「……身体を鍛えなかった俺の落ち度。逆にいい教訓になった」

ひたすらに頭を下げ続けるヴィータに、やや弱ったように返答する要。

「許して欲しい、なんてワガママだけど……本当に、ごめんなさい」

「……」

段々とヴィータが不憫に思えてくるほどの謝りっぷりだった。

「要」

そこへ天の助けの如くシグナムから声をかけられる。

「ヴィータはここまで言った。後はお前次第だ」

「……分かった。ヴィータ」

「……ッ！」

要がヴィータの名前を呼ぶと、彼女は僅かに肩を振るわせた。

「……ヴィータのやった事は、まあ、俺じゃなければ死んでいたかもしれない」

「……」

「……そうだな。今俺は凄く喉が渴いている」

「……へ？」

突然おかしな事を言われ、ヴィータが呆けたように声を出す。

「……恐らく寝すぎていたんだろう。今にも声が枯れそうだ。だから何か飲み物を買ってきて欲しい。それで手打ちだ」

「そ、そんなのでいいのか……？」

ヴィータはてっきりきつい言葉を言われると思っていたのだろう。思わず頭を上げて要の顔を見やる。

だが、そこにあるのはいつも通りの無表情だけだ。

「……早くしないと気が変わるかも知れないぞ？」

「わっ、わかった！ 買ってくる……！」

要の一言でヴィータが素早く廊下へ飛び出し、看護師らしき人から大声で注意されてやや減速し走っていった。

「……まさか守護騎士を使い走りにするとは」

「……あまり謝られるのは好きじゃない」

シグナムがため息をつく。

「ところで要」

「……何だ？」

「あの時、何でヴィータの攻撃を受け止めなかった？」

あの時、とは、恐らく入院する原因となった時の事だろう。

「お前ほどの者なら受け止められただろう。それをあえて止めなかったんだ、それなりに理由はあるんだな？」

「……そうだな。受け止めるという事は、間に壁を作ることだと俺は思っている」

「ほっ」

「……話し合いをする前から壁を作ってしまったっては元も子もないだろっ」

「だからあえて自分の身で受けた、と」

「……馬鹿なことをしたと笑ってもいいぞ。俺自身この意味は良く分かっていない」

「誰かの受け売りか？」

「……親父だ」

「また『親父』か……」

もう何度目かも分からないため息をシグナムが吐き、そこでふと疑問を口に出す。

「そういえば……『親父』は良く聞くが、母親という単語はお前から聞いたことがなかったな」

「……」

「何か事情でもあるのか？」

そこまで聞いておいて、少し無粋だったか？ とシグナムが心の中で呟く。

「ああ、いや。答えにくいことなら答えなくてもいいぞ」

「……親父はいる。母親は知らない」

「知らない、とは？」

「……どうやら、俺は昔の記憶がないらしい」

記憶喪失。シグナムの頭の中で、そんな単語がはじき出される。

「……たまに何かを思い出そうとすると、まるで『誰かに消された』」

みたいに白い靄がかかって、思い出せないんだ」

シグナムはそこで気づいた。

普段感情を一切表に出さない要が、僅かに寂しそうな表情を浮かべている事に。

「そうか……。悪いことを聞いてしまったな。すまない」

「……これは俺の独り言だ。たまたま聞いてしまった人が謝るのはおかしいだろう」

「ふっ……。それもそうだな」

少し病室の空気が重くなる。

そしてそんな空気を払うかのように、絶妙なタイミングでヴィータが病室へ戻ってくる。本当に急いで買ってきたのか、やや呼吸が乱れていた。

「要！ 買ってきたぞ！」

ヴィータが右手を高らかに突き上げる。

その手の中にあっただのは、二酸化炭素を中に閉じ込めた清涼飲料水。

「……なあ、シグナム」

「……どうした？」

「……炭酸は、危険な気がするんだ」

「……ゲップでも出ようものなら、確実に大変なことになるな」

『いやー仕事終わったぜ』的な顔をしているヴィータ。そんな顔をされてしまえば、『悪いけどもう一度買ってきて』なんてとても言えないだろう。仕方なくコーラを受け取る要。

「……」

「……まあ、頑張れ。お前が言ったんだし仕方ないだろう」

この後、ゲップが折れた肋骨に響くという尋常でない痛みに耐えながら、たまに生死の境をさ迷いながら、寿命を削る程度の炭酸飲料水を飲む要であった。

この姿を見たシグナムは後に語る。

無茶しやがって、と。

第9話 入院生活の始まり (後書き)

私と！

？「最近出番のない俺の！」

『ずっと作者のターン！ のこおなああー！』

？「出番よこせ貧弱一般人」

せめて貧弱駄文作者と呼べ。そして貴方の出番はしばらく来ない。

？「なん……だと……！？」

残念ながら現在は要君のターンです。貴方は黙ってオーバーキルされてなさいな。

？「俺のターンは始まってすらいなかった」

第10話 お隣さんは

思わぬところで肉体的に大ダメージを受けた要は、これ以上悪化させないためにも大人しくベッドに横になつて眠る事にした。怪我の療養なら寝るのが一番だ、とは彼の言葉だ。

……が、肋骨の痛みが強すぎて、中々眠ることが出来ないらしい。たまに身体を動かしては痛みでビクツと身体を震わせる要。責任を感じて看病しようとするが良く分からず途方にくれるヴィータ。二人を見てやれやれ、とアメリカンな仕草をするシグナム。ある意味で力オスな状況となっている。

「何なら膝枕の一つでもしてやったらどうだ？」

「ひっ、膝……！？」

「……シグナム、これ以上場をややこしくしないでくれ」

やや顔を赤くして驚くヴィータと、シグナムの代わりにため息を吐く要。少し前まであれほど静かだったというのに、今やお祭り騒ぎのような事となっている。

さて。話は変わるがここは病院だ。

本来病院……いや、公共の場なら口を慎む事はマナーのようなものだ。

うるさければ当然、クレームというのは来るわけで。

ガラツ、と閉じられていた病室の扉が横にスライドされ、誰かが顔をのぞかせながら注意を呼びかける。

「すみませーん！ 少しうるさいので静かにしてくれませ」

注意をしにきた人 細かく言うと金髪の少女 の動きが固まる。

そして、要にはこの少女に見覚えがあった。

「……え？」

金髪の少女が驚きの声を上げる。

「貴方は……」

「……絶賛入院中だ。手は出さないでくれ」

とりあえずあの時の仕返しをされないよう事前に釘を刺す要であった。

「何だ要、知り合いか？」

「……知り合い、なのか？」

「何故私に聞く……」

混沌とした病室に、静けさが戻った一瞬であった。

金髪の少女はフェイト・テストロツサ・ハラオウンと名乗った。
名前が長いのでフェイトと呼ぶ事にした。

「……………」

「……………睨まないでくれるか。根に持つ女は嫌われやすいぞ」

「に、睨んでないもん」

殴られたことをまだ根に持つてるのか、要に注意されるまでじつと要の事を見続けるフェイト。

ちなみにシグナムとヴィータはいない。二人で飲み物を買ってくる、と言ったきり戻ってこないのだ。

「……………逃げたなアイツら」

「ふえ？」

「……………独り言だ」

「そ、そう」

重苦しい空気が病室を包み込む。

当然だ。少し前は敵対していた二人が同じ場所にいるのだから。

「……いつまでいる気だ？」

「えっ？」

「……注意をしにきただけにしては、やけに長い気がするが」

「え、えっと……」

元々フェイトは要達の声が大きすぎたのを注意しに来ただけだったはずだ。

ところが注意をして終わりかと思いきや、備え付けのパイプイスに座って要と会話をしていたりする。完全に居座る気満々だ。

「……ねえ」

「……何だ」

「どっつてそんな喋り方をするの？」

「……どうでもいいだろう。変えれないし、変える気もない」

「何か、まるで……機械と話してるみたい」

機械。

フェイトはそんな単語を口にし、そして即座に顔を曇らせる。

「……世間話が見たいなら、もっと口の回る人と話せばいい」

「……寂しく、ないの？」

「……何が」

「貴方の声、人を避けてるように聞こえる」

「……」

要が黙り込む。

「私も少し前はそんな感じだったから……分かるんだ。一人は辛い」

「……さっきいた二人が見えなかったのか？ 別に俺は一人ではない」

「でも、本当に心を許してるようには見えなかった」

「……お前は説教をしに来たのか？ 注意をしに来たのか？ それとも同情か？」

「ち、違うよ！ 私は……！」

フェイトの声に被せるように要が続ける。

「……何が言いたいかは知らないが、言葉がうまくまとまらないならまとめてから話に来い」

言外に出直せと要に言われ、フェイトは少し沈んだ表情で病室を去っていった。

「……随分と邪険に扱っただな」

直後、計ったようなタイミングでシグナムが病室へ姿を現す。

「……見てたのか」

「いや、彼女が出て行く時の表情を見てな」

絶対に見てたなコイツ、と要が心の中で呟く。

「……まあ、いい。ところでシグナム」

「どうした？」

「……はやては？」

「ああ……」

話題を変えた要だが、シグナムの沈んだ顔を見てこれは不味かったか？　と思い始めた。

「主は　とうとう倒れた。丁度要の隣の病室だ」

そこまで聞いて、待てよ、と要は今の言葉を頭の中で反芻する。

丁度隣の病室だ

さて。ここで先ほどフェイトが来た理由はここがうるさかったからだ。

あまり大声を出して騒いでいたわけではないため、声が聞こえるのはごく限られた範囲だろう。

たとえば、お隣だったとか。

「……シグナム。俺はどうやらはやてのお見舞いは行けないらしい」

「さっきの子がいない時を狙って行くんだな」

「……常にいる気がしてならない」

第10話 お隣さんは (後書き)

ちょっと力尽きたので今回はあとがきコーナーは無しで。

灰音様、毎度毎度素早い感想ありがとうございます。更新するたびビクビクしてますよ、ええ。

第11話 要、拉致される

要が病室に籠りだして三日たった。

シグナムやヴィータはちよくちよく顔を見せては「いつ主に会いに行くのか」と質問し要が全力で拒否。どうあってもあの金髪の少女……もとい、フェイトには会いたくないらしい。

何が彼をここまで頑なにするのかシグナム達には分からなかったが、主こと八神はやてには要が目覚めたことを既に教えてある。

はやては動けるようならすぐにもお見舞いに行きそうな顔をしていたりする。

ちなみにはやてには要の入院理由を『階段で滑って転んだら肋骨折れた』という事にしてある。無理しかないような説明だが純粹な少女はすっかり信じてしまっている。

「いい加減動いたらどうだ？ 毎日毎日ベッドの中じゃ退屈だろう」

「……退屈と引き換えにフェイトに会えと言っのか」

「……前世で何かあったのか？」

そしてここは要の病室。

要はどう見ても人間離れしてる速度で折れた骨がくっつき始めており、もう既に折れた骨の何本かはくっついていて。完全復活まで既に秒読みの段階に入っていたりする。

「それに。もうそろそろ動いてもいいのだろう？ たまには運動したらどうだ」

「……身体が鈍っているわけでもないのに動けと？」

「少し前にそろそろ鍛えないと言ったのはどこの誰だったか」

「……きつとヴィータ辺りだろう」

勝手に捏造するな、とシグナムから冷静なツッコミをもらい黙り込む要。

「……少し前に主の所に顔を出したが、例の金髪の子はいなかったぞ?」

「……どうせ既に来ている」

「とことんネガティブだな……」

要のネガティブ精神がそろそろオーラとして周りに滲み出したりしないか本気で心配するシグナムであった。

「というかあの子を見た目的にまだ学校に通っている歳だろう。今日は平日なんだし来るのは大分後じゃないのか?」

現在は太陽が丁度真上に来る位置、つまりお昼時だ。学校に通っているならば基本くることは出来ない時間だろう。

「……世の中には午前授業というものがある」

「いい加減諦めたらどうだ?」

「……諦めたら試合終了なんだ」

「お前は一体誰と戦っているんだ」

ちなみにヴィータははやての方にいるらしく、この病室にはいない。時たま右のほうから壁を通して楽しげな声が聞こえる。

「ほら、ヴィータは楽しそうじゃないか。お前も来たらどうだ?」

「……あれはヴィータの性格からだろう」

「……要、少しイライラしてきたんだが。お前も男なら腹を決めたらどうだ」

「……男なんて置いてきた」

「どこにだ!？」

もう訳が分からないと言いたげにため息を吐くシグナム。

「……今の俺は男の子ならぬ男の娘」

「それを自分で言うか……どれだけ行きたくないんだ」

『俺、目的のためなら男なんて簡単に捨てますよ』的な台詞を要に言われ二度目のため息をつく。

白い肌や男にしてはやや長めの髪、ややか細い声など、しっかりと整えれば形になりそうなナリをしているから冗談に聞こえないシグナムである。

「そのうちシャマルがお前を襲いに行くかも知れないな……」

「……すり替えておくから問題ない」

「すり替える?」

「……ヴィータに」

「共通点があるだけにか？」

ちなみにこの時壁を通してヴィータが身体を震わせたというのは余談である。

「……シグナムめ」

結局要はシグナムにやや押し出されるような形で病室から出て、絶賛散歩中である。

ちなみに治りかけとはいえ元々重傷の身だ。両脇に松葉杖を挟み、やや歩きづらそうにして歩く要。

先ほど散歩と言えば屋上とばかりに目指して歩いていったのだが、扉を開ける前に外から喧嘩するような声が聞こえたので中止、仕方なく病院の中を歩き回っている。

「……こっちから反応はないな」

紅い前髪の一部をピコンピコンとレーダーのように尖らせ、例の金髪少女がいない道を髪が指しそちらへ歩く要。色々と凄い事になっている。

かつかつと松葉杖を鳴らしながら歩く姿はただの病人で、近くを通りかかった人達からも特に怪しい視線を送られることも無い。

唯一つ、紅い髪を除いて。

やっぱり日本人にとっては珍しい色だ。通り過ぎる人は大体要の髪を見る。

たまに要より小さな子供が髪を引っ張ったりしたり『何で紅いの？』と純真無垢な瞳で見つめられながら質問されたりと色々忙しい要であった。

「……シグナムめ。帰ったらどうしてやるつか」

普段感情を表に出さない要が珍しく怒りの感情を僅かに漏らす。

「　　ツツツツ！！！！？」

直後、全く違う場所でシグナムが背筋にとてつもなく寒いものを
感じ思わず身体を震わせたが、これは関係ない話である。

結局要はたいして気分転換も出来ず、むしろやや疲れた様子で病
室の前まで戻ってきた。

「…………とりあえず一発殴ろうか」

恐らく中にいるであろうシグナムに何をどうしてやろうか黒い考
えをする要。

病室へ続く扉を近くに『神楽 要』と書かれたネームプレートが
あり、それを確認し要がゆっくりと病室に入る。

要は気づかなかった。いや、気づけなかったのだ。

疲労のせいで見落としていた。

『八神 はやて』と書かれたネームプレートが要の病室の『左側』にあつた事に。

そして、廊下の奥、ちょうど曲がり角の所でピンク色のポニーテールの尻尾が揺れていた事に。

「……」

要は病室への扉をスライドした直後身体を固まらせる。

視認。八神はやてが一人。ヴィータが一人。茶髪の少女が一人。

そして、例の金髪ツインテが一人。

「あ、かなめくん。やーっと来てくれたんか……。シグナムに頼んでも全然来ないから心配してたんやで」

「……はやて、どうやら俺は間違った所へ入ってしまったらしい」

その場でリターンし外へ出ようとする要だったが、間にヴィータが素早く入り込みそれを許さない。

「ま、まーまー！　せっかく来たんだからゆっくりしていけばいいじゃないか！」

笑顔を貼り付けたヴィータが要に気づかれぬよう、後ろ手でこっ

そり開かれた扉を閉める。

「……これはシグナムの策略か？」

「シグナム？ い、いや、関係ないけど」

ややどもっている辺り完全にシグナムの仕業だろう。

孔明め……と口の中で呟く要。

「……冷蔵庫の上から一段目の一番奥、冷凍食品の右隣」

「なっ、なぜアタシのとおきのおきのアイスの位置を知ってる!？」

「……位置を知っているという事は、それを簡単に取り出す事も出来る。返して欲しくばそこをどけ」

「くう……だ、ダメだ！ どけない！」

ヴィータがとおきとおきと言う辺りとても貴重なものなのだろうが、それを人質にとられても動じない辺りさすが守護騎士だ。

「うん？ 二人してコソコソ何話してるんや？」

「……ちよつとした交渉」

「まあまあ。せつかく来たんだしこつちおいでーな。いつまでも立ちっぱなしは疲れるやろ？」

はやてが要たちに優しく話しかける。

「そ、そうだな！ ほら要、こっち来いよ！」

ヴィータが要の手を引っ張り、無理やり病室の中へ連れ込む。

「……後で覚えているシグナム」

呪詛の言葉を吐きつつも抵抗はせず、大人しくそれに従う要であった。

「……男とは何故こつも無力なのか」

そんな様子を雲の上から見ていた髪の長い少年がため息を漏らす。

『しょうがないだろう。生来男とはそういうものだ』

「たまには逆らう男も見てみたい」

『先にあるのは破滅だな』

「……」

少年と神が雲の上に胡坐をかいて談笑している。

「とうかさ、俺久々の出番じゃね？ 出番がきたよ！ やったね俺！」

『……ドリ符「信頼と実績の金ダライ」』

神が一言呟くと、喜び舞い上がる少年の頭の上から突如謎の金ダライがどこからともなく落下、カーンと気持ちのいい音を鳴らし少年の後頭部に命中、思わず少年が声を漏らす。

「メメタア！ ……こいつあひでえや」

『神が言っているのさ。メタ発言は良くないと』

「言ってるも何もお前が神だろうに……あ痛」

タンコブが出来てないか心配した少年が手で頭をなでようとして、鋭い痛みを顔を引きつらせる。

掌を目の前に出してみれば、爪が刺さり血が出た場所の皮膚がひきつれて塞がっていた。痛みの原因はこれだろう。

『ふむ……どれ、私が治してやろう』

神はそう言うと少年のひきつれた手に自分の手を当て、スツと横にずらす。

すると、先ほどまでひきつれていた皮膚がすっかり綺麗に塞がり、少年が手をにぎにぎとするが痛みもない。

「これはすげえ。何？ 医療の神だったりするの？」

『残念だが医療は専門外だ。主に時を中心に扱っているよ』

「時を操る神ね。どこのルシフェルかと」

『なら君はイーノックか』

「おいやめる馬鹿。誰が歩く死亡フラグだった？」

そこで突如どこからともなく金ドライが二つ飛来し、少年と神の頭に見事に命中した。二人が同時に声を漏らす。

『「……おつふ』

第11話の要、拉致される（後書き）

今回もあとがきコーナーはなしで。質問とかもないですね。

第11話〜ちよつとした閑話〜（前書き）

この話は『何故ヴィータがなのは達を襲ったにも関わらず同じ病室にいてなおかつ険悪な空気じゃなかったのか？』という事の説明的な話です。いわば番外編のようなもので、この話を見なくても特に本編には影響ありません。

それではどうぞ。

第11話 5話 ちよつとした閑話

要がはやてのいる病室へ拉致される少し前。

『流石に家に誰もいないというのは不味い』という理由からシャマルとザフィーラを家に残し、自分達の主である八神はやてと仲間内の不注意で怪我をした神楽要のお見舞いにと果物が詰まったバスケットを片手にシグナムとヴィータが病院の廊下を歩いていた。

お見舞いという単語からして二人の表情はどうにも優れない。どちらもちやや暗い顔をしている。

先ほどから二人の間に会話は無く、それが相成ってさらに二人の気分を暗くする。

私達の主に残された時間は後どれくらいなのだろうか。

要の怪我は大丈夫なのか。

考えている事は違えど内容は似たようなものだ。

「……はあ」

ついにはため息までシンクロしてしまう二人であった。

そんな空気に耐えられなくなったように、ヴィータがぼつりと漏らす。

「……ダメだな、こんなんじゃ」

「ダメ、とは？」

ヴィータは先ほどまでの暗い雰囲気吹き飛ばすようにやや無理に笑みを浮かべながらシグナムに答える。

「主はやてを守るための騎士であるアタシ達がこんな暗い顔してたら、逆に心配される。もっと明るい顔をして会いに行こうシグナム」

ヴィータのそんな言葉を聞き、シグナムもそうだな、と答える。

「主に心配される守護騎士なぞ、騎士失格だな。ありがとうヴィータ」

「礼なんていらさないさ。それよりシグナムも笑顔の練習練習！」

先ほどの無理なそれとは違い、やや柔らかくなった顔で子供らしく笑いながらウィータがシグナムを元気付ける。

シグナムもそれに習い大人っぽい微笑を浮かべながら、目の前の病室へ続く扉を横にスライドする。

ドアの横のネームプレートは『八神はやて』。

病室へ入った直後、ヴィータの身体が一瞬硬直。シグナムがやや目を細める。

「あ、ヴィータにシグナム。お見舞いに来てくれたんか？ わざわざありがとうな」

目を覆いたくなるほどの真っ白い病室の、真っ白いベッドの中に八神はやては上半身だけ起こして二人に話しかける。

「あ……」

搾り出すように声を出したのは、はやてでもシグナムでもヴィータでもない。

はやての寝ているベッドのすぐ近く、備え付けのパイプイスに座っていた金髪をツインテールにした少女。

そしてその隣には栗毛をサイドポニーにした少女もいる。

ヴィータは二人を見て目を見開く。何せ、ヴィータは一度彼女達に攻撃を仕掛けた事があるからだ。

はやてはヴィータが二人を見ている事に気づいたのか、二人の事をシグナム達に紹介する。

「そか、まだ二人は会った事なかったっけ。なのはちゃんとフェイトちゃんや」

「たっ、高町なのはです」

「……フェイト、です」

二人の挨拶はどことなくぎこちない。

当然だろう。彼女達にとってヴィータはいきなり襲い掛かってきた危ない人という認識しかない。

「ほらほら二人とも挨拶してくれたんやから、シグナム達も」

「……シグナムだ。主はやてが世話になったみだいな」

「……ヴィータだ」

シグナムはやや落ち着いた声で、ヴィータはぶっきらぼうに答える。

シグナムはヴィータからなのは達の事を聞いているので、最悪のタイミングで来てしまったか……？ と頭の中で呟く。

敵同士が鉢合わせした結果、言いよりの無い気まずい空気が流れる。

はやても流石にそんな空気に気づいたのか、

「な、何や？ 何か元気ないみたいやけど……」

「主。私達は彼女達と少し話したい事があるので、屋上へ行ってきます」

「そ、そか」

シグナムが会話を終わると同時、栗毛と金髪の二人の少女にアイコンタクトを送り、向こうもそれに気づき小さく頷く。

「すぐ戻りますので。あ、お見舞いの品はこちらに置いておきますね」

「わ、分かったで。気をつけてなー」

シグナム達が扉を横にスライドして病室から退出し、なのは達が後を追うようにやや早歩きで病室を出て行く。

一人ぼっち残されたはやは、重たい空気から開放され一人ため息を吐いた。

「……な、何だったんや？ 先ほどの空気は……」

屋上。

シグナムとヴィータ、なのはとフェイトが柔らかな陽射しをその身に受けながら、距離を置き対峙する。

「あの……それで、話って……？」

栗毛の少女ことなのはがおずおずといった調子でシグナム達に話しかける。

「盗聴は……無さそうだな。なのはと言ったか」

シグナムは最初辺りを素早く見回した後、何も無いことを確認しなのはに答える。

「いいか。これから話す事は誰にも話してはいけない。この四人で秘密という事になる。……誰にも言わないと約束できるか？」

「で、出来ます」

何となくいつかはらしそうな気がしたシグナムだが、ここまで言っておいて何も言わなければ向こうも納得しないだろう。静かに語りだす。

「お前は確か、ヴィータに襲われてリンカーコアから魔力をとられたんだっただな。……そちらについては謝罪しよう。すまなかった」

話し出したかと思えばいきなり謝罪された事にやや戸惑うのはだったが、もう回復したから大丈夫です、と答える。

「そう言ってもらえると有難い」

「あ、あの……どうして私から魔力をとったんですか？」

「……私達には、どうしても魔力が必要だったんだ」

その言葉を切り口に、シグナムは二人に他人には秘密にしていた事を打ち明ける。

闇の書のこと、彼女達守護騎士の事、主である八神はやての事。要の事は、彼女自身よく分かっているないので省略。

信じられないような事を聞かされ、なのはとフェイトが同時に驚き、戸惑いながらシグナム達に問いかける。

「えと、つまり……」

「その闇の書というのを覚醒……？ させないと、はやてちゃんが死んじゃうって事……？」

「　　そうだ」

「そんな……！」

せつかく出来た新しい友達だというのに、このままだと一生離れ離れになってしまう。

「……それが嫌だからアタシはオマエから魔力を奪ったんだ」

申し訳無さそうにヴィータがなのはへ向けて言葉を紡ぐ。

「許すとは言ってくれたけど……本当にゴメン」

最近謝ってばかりだ、とヴィータは心の中で自嘲する。

「それならそうって先に言ってくれば良かったのに……」

なのはが優しく微笑みながらヴィータに答える。

「そういう事なら私達も協力するよっ」

「そう言ってくれると助かる。主はやてが心配しないよう見てやっていくれ」

「分かったのっ」

少し前まで流れていた険悪なムードはどこかへ飛んで行き、暖かな空気が包み込む。

……たった一人を除いて。

「……？ どうしたのフェイトちゃん」

「……」

金髪ツインテールことフェイトが、先ほどから黙り込み、なのはの呼びかけにも応じない。

「フェイトちゃん？」

「……ふえ？ な、なに？ なのは」

先ほどより少し強めに声をかけられ、正気を取り戻したように反応するフェイト。

「何か気がかりでもあったか？」

シグナムがフェイトに問いかけ、フェイトがうんと答える。

「あの紅い髪の男子の事、どうしても気になって……」

「……要か。何かされたか？」

やや冗談交じりにシグナムが言葉を紡ぐ。

「アイツに何かするような度胸はないように見えるけどな」

「いや、男は獣と言っただろつ。もしかしたら既に……」

「ええっ！？ フェイトちゃん、そんな……」

「ちっ、違うよ！… 皆して何を想像してるの！？」

『何か』という単語に異常に反応するのはと、顔を真っ赤にしてそれを否定するフェイト。少しだけ空気が和やかになる。

「まあ冗談は置いて、だ」

「最初に言ったのはあなたでしょうに……まあ、いいです」

一拍置き、フェイトが語り始める。

「あの子、何て言うか……独りなのに、寂しいはずなのに、人を寄せ付けようとしなみたいなの」

「……ほう」

「話しかけてもまるで機械みたいに冷たくて、でもどこかで温もりを求めている。そんな声をしてた」

「つまり。要は一人は嫌だが人に話しかけられてもうまく対応出来なくて、結果人を突き放してると？」

「そんな感じがします」

「で。フェイトはそんな要が放っておけない、と」

「はい」

ふむ、と片手を顎に当てしばし考え事に耽るシグナム。

しばしの沈黙の後、何かいい案を思いついたらしく、口元に微笑を浮かべる。

「……三人とも、少し耳を貸してくれ」

三人が寄り添いあうようにしてシグナムの声に耳を傾け、やがてその案に全員頷き、早速その作戦を実行すべく各自行動し出す。

要が病室に拉致られる事になるのは、この後およそ数十分後である。

第11 / 5話 / ちよつとした閑話 (後書き)

? 「女三人寄れば何とやら」

神「では四人寄ればどうとやら?」

答えは混沌! それでは始まりますよ!

『ずっと作者のたーん! のこおなあー!』

いきなりですが。えー、今回の話はこの小説初の番外編となっております。おります。

? 「番外編と言う名の補足だけだな」

神「眠いのを我慢して夜に更新するから文章を上手く作れないんだぞ?」

兄にPC奪われて開放されたのが夜だというのにその時間以外にどう更新しろと?

? 「今は悪魔が微笑む時代だ。倒して奪い返せ」

私に死ねと申すか。

神「骨くらいは拾ってあげよう」

既に死ぬこと前提ですかコノヤロウ。

第12話 友達の定義

ズゴゴゴゴゴ、と病室の中を異様な空気が包む。

それは間違えて入ってきた小さな子供が涙目になりながら『ごめんなさい』と何十回も頭を下げてから子供には出せないであろうとてつもない速さで病室から立ち去る程の空気。

「……………」

そして、そんな空気を醸し出している原因はこの紅髪の少年。

そう。神楽要である。

普段感情なぞ一ミリも表さない要だが、今この瞬間は負のオーラを垂れ流している。

機械のような無表情の後ろに般若の顔がちらついて見えたりするのはきつと幻覚か何かだろう。

だが、そんなアブナイ幻覚が見えるほどのこの状況、どう見ても詰んだと思えない。

例えば、RPGで最初のダンジョンに潜った時、最初の一步を踏み出した瞬間魔王に出会うような。

要は病室に備え付けられていたパイプイスに深めに座って両手を組み、顔を伏せて目を瞑っている。

……そして、泣く子も逃げ出す危険な空気を常時滲み出している。

「あ、えっと……お茶、どうぞ」

「……頂上」

とりあえずさつとミニペットボトルのお茶を要に差し出すフェイト。要は醸し出す雰囲気とは裏腹に丁寧に受け取り、渴いた喉を潤す。

そして再び沈黙。

早くも嫌な予感しかしないヴィータ。あれ、失敗だったか？と冷や汗を流し始めている。

「な、何や？ さつきからみんな黙りこくって……何かあったんか？」

「い、いや！ 何も無い！ 何も無いから！」

「そ、そか」

ちなみにはやては要がここにいる理由は『自分から会いに来た』としか認識していない。実際は強制的に連れてこられた、というのが正しいが。

「……あ、あのっ！」

なのはが勇気を持って話しかけてみるも、

「……何だ」

「あう……何でも、ないです」

要が少し睨み付ければ（彼にその気はないが表情がないのでそう思われている）途端に俯き黙り込んでしまう。

思った以上に厳しい。それがなのは、フェイト、ヴィータの三人の感想。

（ど、どうしよう……思った以上に手ごわいよ要君）

どう攻略すればいいか分からず、おろおろと辺りを見回し、他の二人に解決の糸口が無いか念話で聞くなのは。

（いつも素っ気無いヤツとは思ってたけど……こんなにキビシイのか）

（あうあうあうあう……）

と、そんな三人のうろたえかたを見て、不審に思った要が三人に声をかける。

「……何をそんなに動揺している」

「「「うえあつ！！？」「」」

「……何故そんなに動揺する」

異口同音の叫び声をあげられ、少しだけびっくりする要。

「な、何でもない！ 何でもないから！」

「そ、そうだよ！ 別に怪しい所なんかないよ！」

「し、守護騎士であるアタシが動揺するハズがががががが」

ヴィータがおかしくなった。

「……企んでいる事があるなら正直に話せ。怒りはしない」

三人を警戒し心を開く気配が全くなかった要。これ以上三人が何か隠し事をすれば、さらに険悪なムードになることは必至だ。

「……本当に、怒らない？」

やや潤んだ目でなのはが要を真っ直ぐに見つめ、小さく頷き肯定する要。

「実は……」

シグナムの考えた作戦は、呆気なく崩れ去った。

「……つまり？」

「フェイトちゃんが要君の事が気になって」

「友達から始めようぜとアタシ達が作戦を立て」

「ゆくゆくは恋人同士に……って！ 何言わせてるの!？」

上から順番に要、なのは、ヴィータ、最後に顔を真っ赤にしたフェイト。

「……」

三人の事情を聞き、それに小さく頷いた要は懐から長方形のカードのようなものを取り出し、

「……ドリ符『信頼と実績の金ダライ、三割り増し』」

「ぎゃっ」

「あっっ」

「うっにゃっ」

「あいたっ!？ な、何故私まで!？」

なのは、フェイト、ヴィータ、そして何故かはやての頭にまでど

ここらともなく飛来した金ダライがそれぞれの後頭部に命中。カーンと心地よい音が四つ響く。

「お、怒らないんじゃ……?」

「……怒ってはいない。そういう事なら最初から言えばいい」

「じゃあさっきの妙な雰囲気は……?」

「……少しストレスが溜まっていただけだ。気にしないでいい」

子供が怯え逃げ回る程度の空気を作り出しておいて『少し』。

ならばかなり溜まっていたらどうなるのだろうか、と四人が考え、瞬時に飛来した悪夢のような光景を振り払うように頭を振る。

「……とにかく。用件がこれだけなら、俺は帰るぞ」

近くにおいてあった松葉杖を手に取りうつとして、

「あ、まっ、待って!」

素早く反応したなのは手がそれを叩き落した。松葉杖が地面に散乱する。怪我をしている要には屈んで拾えそうも無い。

「……」

要が思わずなのはの方を素で睨み付けてしまう。なのははビクッと肩を震わせるも、先ほどのように黙り込んだりはしない。

「ひつ、一人は辛いと思うの！ 要君一人ぼっちだって聞いて……だ、だからっ！！」

「……だから、俺の友達になりたいとでも？」

要に言いたいことを言われ、なのはがこくこくと頷く。

「……俺よりも楽しい友達というのはいらるだろう。他をあたってくれ」

「それじゃあ要君一人ぼっちのままだよ！ ……それでいいの？」

要には何故ここまでなのはが食いついてくる理由が分からなかったが、このまま断り続けても彼女は断固としてそれを認めないだろう。

……観念したように、要がため息をつく。

「……友達の定義というのは」

「え……？」

「……いや、どうすれば友達と呼べる？ 悪いが俺にはわからない」

要の返答を聞き、嬉しそうに顔を綻ばせながらなのはが言葉を紡ぐ。

「簡単だよ……。名前を呼んで。お互いに名前を呼び合って、認め合えばいいんだよ」

「……名前、か」

要は知らないが、なのはこの言葉が使われるのは二度目の事。

機械のように戦い続け、そして最後にはお互いを認め合った金髪の少女との約束。

「……高町なのは、と言ったか」

「うん……」

「……なのは。これで良いか？」

「うんっ！！」

今にも飛びつきそうななのはの顔に、要の機械のような顔が、僅かに笑みを浮かべた。

第12話「友達の定義」(後書き)

今回もあとがきコーナーは無しで……最近どうにも寝不足で。

灰音様、いつも感想ありがとうございます。大変励みになっています。

第13話 我思う、故に少女はそこにあり

あれから更に数日経った。

なのは、フェイトは毎日というわけではないがちよくちよく要の病室にも訪れる様になり、シグナムとヴィータだけだった病室の中に二人が追加されさらに賑やかになる。

なのはやフェイトが学校での他愛の無いことを話し、残りの三人がそれに各々言葉をぶつける。

「ほう。また告白されたのか」

「で、フッタのか？」

「フッタ事前提なんだ……」

「……」

涼しく感じる程だった小さな病室は、ヒトの感情で溢れ返り、その中にいるヒト達の心を温める。

そしてそれは、要もしかり。

「そしたらね？ フッタ人がフェイトちゃんに無理やり迫ろうとして」

「見事返り討ちにあった、と」

「……哀れだな」

「あ！ 今要君笑った！」

「笑うと言っても鼻で笑うだけだなー」

機械のように感情を表に出さなかった要は、少しずつ、ほんの少しずつだが、己の喜怒哀楽を表すようになった。

「要君もういっかい！ もういっかい笑って！」

「……意識して笑う事など不可能だ」

「そう言えばフェイトちゃんがフツタ人、後でほかの人にアタックしてビンタされたんだって」

「ッ……不意打ちは卑怯だ」

「鼻で笑う事は出来るようになったが、純粹に笑った所を見た事が無いな」

「……俺を笑わせたいなら大物芸人を五十人は呼んで来い」

「ビンタされた人だけど、その後地面に倒れたらビンタした子のスカートの中身を見ちゃって、その後顔が三倍に膨れ上がったんだって」

「ッ……」

「さつきからどうして私の話ばかりなの……!?!」

氷付けにされた『ココロ』の氷がゆっくりと溶かされていく。

要にも肉親はいるが、『彼』でも要の氷付けにされたココロを溶かす事など出来なかった。

要が徐々に機械からヒトに変わり行くのを喜ぶ一方、シグナム達守護騎士の顔はあまり晴れなかった。

「……主」

「あ、シグナム？ 今日もお見舞いに来てくれたんか？」

「ええ」

以前よりも細くなった主こと八神はやての声を聞き、シグナムは短く返事をする。あまり喋らせるわけにはいかない。

「なのはちゃんとフェイトちゃんは今日は要君の所？」

「はい。仲良くやっていますよ」

「いいなー……。私も混ざりたいわー」

「要はもうすぐ退院出来るでしょうから、その時皆で会いに来ますよ」

闇の書の侵食により、徐々にその命が終わりへと近づいているのをシグナムは感じ取る。

現在の闇の書のページ数は、六百六十一ページ。覚醒まで後一步だ。

だが、はやての命の灯火も刻一刻と小さくなっている。闇の書が覚醒した時何が起きるかは分からないが、それだけに主の事が心配で仕方が無い。

「要君、最近よく笑うようになったと思わへん？」

「まあ、笑うと言っても鼻で笑ってますが」

「いや、そうじゃないんや」

はやての言いたい事が分からず、僅かに首をかしげるシグナム。

「顔は笑ってへんけど、ココロが笑っとる。どうしてかは分からないけど、何となく分かるんや。やっぱり独りは辛かったんやろなあ……」

心が笑ってる？

言葉の意味が分からない、とシグナムは心の中で呟いた。

「初めて会ったときな、フェイトちゃんも言ってたけど……本当に機械みたいやった。でも今は違うんや。何というか、ただの無表情な普通の男の子。皆と同じように笑って、泣いて、怒って、喜んで。もう機械なんて言えへん。あの子は立派な人間やね」

白いベッドに身を預け、起きる事すらも難しくなったはやてが細く、小さくそう言った。

「……私も、要君みたいになりたかったなあ」

大きな瞳のすぐ下、涙腺と呼ばれる部分を静かに濡らしながら、八神はやては窓の向こうの景色を見つめた。

主が泣く姿を、主を守る騎士は黙って見つめていた。

「……シグナム」

「はい」

「私、死にとうない」

「……」

「皆に会う前は、私は死んでもいいと思ってた。会う人会う人に迷惑かけてばかりで、それでいて私はただ謝ることしか出来なくて。死にたいとも思ってたんや」

普段、あんなに強気だったはやては、今は、今だけは一人のか弱

い少女になり静かに枕を濡らす。

「……でも皆に会って、なのはちゃんやフェイトちゃんと友達になつて。それで、要君とも会って。何も出来ない私を認めてくれた。色々な事をしてくれた」

少女の独白を、俯き、ただ静かに聴くシグナム。

「一人だと死にたいと思って。でも皆といると生きたいって思う。私ってワガママかな……？」

「ああ、ワガママだ」

突如病室に響いた第三者の声に、はやてとシグナムが思わず振り向く。

「はやて。お前はとってもワガママだ。でも、だからどうした？ お前なりに生きたいと願うのなら、その願いを叶えるためにワガママになればいい。違うか？」

両手に松葉杖を抱え、かつかつと音を鳴らしながら病室に入ってきたのは、紅い髪の少年。

その声は普段のようなタイムラグのあるか細い声ではなく、凜として響き渡る力強い声。

「皆に迷惑かけてばかりで申し訳ない？ 当たり前だ。迷惑をかける人間なんていない。そんなヤツがいるならば、ソイツはもう人間じゃないだろうな」

紅い髪の少年 神楽要は、ただ真っ直ぐに八神はやての目を見据える。

あまりにも真っ直ぐすぎるその視線に、思わずはやては目を逸らしてしまう。

「死にたいなんて言うな。お前はただ『生きたい』とだけ言ってればいい。後は俺たちがその願いを叶えてやる。どんなに辛くても、

どんなに苦しくても。絶対に実現させる」

松葉杖を操りながら要ははやてが横になっているベッドのすぐ隣まで移動し、はやてに語りかける。

「一人でいると死にたくなる？ そんな事を考える必要はもうない。皆がいる。俺がいる。さあ、ワガママを言ってみるよお姫様。俺たちがそれを全力で叶えてみせる」

それは、普段感情を、ココロを露わにしない要の本心。普段なら決して聞けるはずもないコトバ。

そしてそれら全てが、はやてという一人の少女に対しての、全力のコトバ。

要の放つコトバの全てを受け止めたはやての口から、自然と声が零れる。

「……………たい」

一度驚いて止まってしまった涙が、決壊したダムから水が流れ落ちるように溢れ出す。

「生きたい……………！！ 私は、もっと生きていたい！！ 皆と一緒に笑合いたい！！」

はやての心からの絶叫を聴き、要は『それでいい』とばかりにうなずく。

「……………分かった。後はそのベッドで寝て待ってろ」

少し前、あれほどに熱弁していた要は普段通りのか細く、機械のような声に戻り、松葉杖をつき病室から出て行った。

まるで嵐のようだな、とシグナムが呟いた。

突然現れて、言いたい事だけ言って去っていく。

だが、その吹き荒れた嵐のおかげで、一人の少女の瞳に魂の灯火が再び灯り始める。

「……さて。私も頑張るとしようか」

シグナムがポツリと呟き、泣きじゃくる八神はやての病室を後にした。

この日、闇の書の覚醒に必要な六百六十六ページが全て埋まり、覚醒の準備が整う事となる。

「……見せたな。『片鱗』を」

要の一瞬の変貌を雲の上からしっかりと見ていた髪の長い少年がぼつりと呟く。

『「片鱗」？』

初めて聞く単語に、神が思わず聞き返す。

「そ。『片鱗』さ。俺の口から詳しいことは言えないが、要の変化をヒントに考えてくれ」

それは果たして誰に言った言葉だろうか？

神か、それとも。

「……さて、俺も準備するとしますかね」

ふとそんな事を呟き、ポケットから八角形のアイテムを取り出した少年が胡坐をかいてその場に座り込み、なにやらカチャカチャと音を立てながら弄り始める。

『うん？ 何だいそれは？』

見慣れないアイテムに神が少年に聞く。

「これか？ んー何と言うか……『八卦炉』。そうだな、これでいいか。簡単に言えばデバイスのようなもんだ」

怪しい文字のようなものが散りばめられた『八卦炉』と呼ばれたそれを神に見せながら、少年が簡単に説明する。

「使用者の魔力を増幅して放つ魔法のアイテム。ま、そんな所」

神はいまいち納得出来なくてさらに質問しようと思ったが、少年が再び八卦炉を弄り始めたのを見て諦めた。

第13話〜我想う、故に少女はそこにあり〜（後書き）

？「俺と！」

私の！

『ずっと作者のたーん！ のこおなあー！』

いきなりですが灰音様、毎度素早い感想ありがとうございます。

？「速さが足りすぎてむしろ怖い。色々大丈夫か？」

感想は来れど質問は来ず。むう……ちょっとこのコーナーが寂しい。

第14話 早すぎた覚醒

闇の書の覚醒の準備は整った。が、シグナム達守護騎士はまだそれを覚醒させようとはしない。

闇の書と言えば彼女たちの産みの親のようなものだ。もし不用意に暴走でもさせようものなら何が起きるか全く想像できない。

そして、いくらはやてが要に勇気付けられたからといって近づく『死』というものは逃れようも無い。一刻も早く覚醒させる必要が

ある。

結局、守護騎士四人が機能出来ずとも何とかしてくれるという希望を託し、要が完全に復活した後、素早く覚醒させようという結論に至った。

「……分かった。なら、俺も静かに療養に努めよう」

シグナムが事情を説明し、それに頷く要。

八神はやてという少女を救出する日は、もうすぐそこに迫っていた。

時刻は深夜。皆が寝静まった頃だ。

緩く吹く夜風に長い黒髪をなびかせながら、髪の長い少年雲の上ではある一点を見つめていた。

「……そろそろ、か」

髪の長い少年がぼつりと呟く。

『ああ、そろそろだな』

腕を組み、雲の上に二本足で立っている神も、またぼつりと呟く。

「さて……。頑張れよじつこころ嬰」

少年がまた呟くと同時。

ドオツ！！ と、とてつもない量の魔力が、ある場所から噴き出す。

魔力反応は、海鳴の病院から。

「……!？」

突如『隣の病室』から噴出した超大な魔力にいち早く反応した要。仰向けに寝ていたベッドから跳ね起き油断なく辺りを見回した後、まだ完全にくつつていない肋骨の痛みを無視し走る。

「……はやて！」

彼にしては珍しく大きな声を上げ、八神はやてのいるはずの病室の扉を横にスライドする。

しかし、そこにいるはずの少女の姿が無い。

「……………」

そこでふと要は気づく。

病室の窓、カーテンで閉められた窓が開いており、そこから夜風が入り込んでいた。

「……………外か」

邪魔にしかならない松葉杖を病室の床に放り投げ、窓から距離をとり、直後、足の筋肉を酷使し全力でダッシュ。要の身体は一瞬にして空へと飛び出す。

ちなみに要が飛び出した病室は地上から数えて三階。普通の人間が同じ事をすれば確実にスプラッタになるような高さだ。

それを要は音もなく地面にしゃがみ込むように着地、肋骨が痛んだが無視、今もなお移動する巨大な魔力を追うように走り出す。

「……………はやて……………！」

はやての病室から漏れ出した魔力、そしてそこにはやてはいなかった。

「……闇の書の覚醒……？」

考えられるのはただ一つだけだが、シグナム達は要が退院してからと言っていた。

なら、一体誰が？

不安を募らせつつも、要はただひたすらに走り続けた。

「……はやて！」

要の探し人は、意外と早く見つかった。

だが、その姿を大きく変えて、だが。

「……」

空に漂うように浮かんでいる女性が要の目に映る。

「……はやて、じゃないな。アイツはどこにいる」

「我が主は……我とともに……」

女性が要の方を向き、虚ろな目に要の姿が映る。

「……『我とともに』……?」

「……そうだ。主は今私の一部と化し、完全に私の支配下に置いている。……いや、正確には『私がのつとつた』と言うべきか」

「……乗っ取った? なら、はやてはお前の中にいると言うのか」

どこを見ているとも分からない女性が、小さくぼそぼそと呟く。

「私は管理人格。闇の書の意味」

「……その管理人格が、何故主であるはやてを乗っ取った」

「これ以上悲劇を生まないためだ。私がいるから、私を扱う人がいるから悲劇が生まれる。ならばそのどちらもが消滅してしまえば、もうそんな事が起きる事は二度とない」

管理人格と名乗る女性は、つまりはこう言いたいのだろう。

私と私を扱える者が一緒に消えていなくなれば、悲劇は生まれぬ

悲劇というものが要には分からなかったが、ただ一言これだけは言える。

「ふざけるな」

「……何、だと？」

「お前の言う『悲劇』がどれ程のものかは分からない。だが、それを起こさないためにはやてを犠牲にするだと？ ふざけるな。お前だって闇の書の一角ならばやてがどんな人なのか見てきたはずだ」

「人間である以上、欲に駆られて豹変する事だつて」

「くだらねえ言い訳をやめろつってんだよ」

一瞬にして豹変した要に、思わず管制人格はのけぞる。

これまでの機械のような声だけを聞いてきた人からすれば、今の

要ははつきりと言えば『異常』だった。感情を表にさらけ出し、暴言を吐いているその姿は。

「俺はてめえの勝手な都合で人を殺すのは許さねえって言うてんだよ。悲劇を生まないために死にます？ 死ぬのはてめえの自由だ。勝手にそこら辺で仰向けになつて死んでりゃいいだろうが。なのに何ではやてを巻き添えにする？ 欲に駆られて豹変？ 人間である以上？ てめえの目は腐つてんのか？」

知っている限りの暴言で管理人格と名乗る女性を罵倒する要。

何が彼をここまで突き動かすのか、それは誰にも分からない。

「はやては言ったんだよ。俺に『生きたい』って。『死にたくない』って。その気持ち踏みにじつてまで勝手に心中するとか考えてんじやねえぞ。どうせ一緒にになりたいんなら生きて一緒になりやがれ。悲劇なんざ起きねえよ。いや、起こさせやしねえよ。何のために俺たちがいると思ってるんだ。誰のために俺たちが頑張ってると思ってるんだ。全部！ てめえの身勝手に取り込んだてめえの主のためだよ！！」

獣の上げる咆哮のように声を張り上げて叫ぶ要。

少しずつ溶けていくはずだったココロは、怒りと言う炎によって一瞬にして蒸発する。

「……黙って話を聞いていれば！ ブラッティダガー！！」

要の罵倒を聞き怒りを露わにした管理人格が魔力で出来た血染めの剣を無数に要に向かって放つ。

要は飛んでくる刃など気にもせず、その場に留まって叫ぶ。

「……聞こえてるんだろ、八神はやて！ いつまでもソイツの言いなりでいいのか？ お前の『願い』はその程度だったのか？

答えるよ、はやて！！」

血染めの剣が要の頬を薄く裂き、そこから血が流れる。

「黙れ！ 主はもう私と一体化しているのだ！！ 今更声など聞こえるはずが ……！！」

「てめえには聞いてねえんだよ！ 答える『八神はやて』！ お前はここで終わっていいのか！？ お前の道はここで途切れていいのか！？ ……いつまでも眠りこけてんじゃねえぞ！」

ブラッティダガーが要の右足のつま先を貫く。だからどうした、と要が呟く。

「私と主はここで運命を共にする！ それで終わりだ！」

「 …… 最初から諦めてんじゃねえぞ。悲劇の一つや二つ乗り越えないでどうすんだよ。てめえは今までもそうやって全部諦めて、何もかも放り出して、そうやって生きてきたんだろう！ そんな奴が勝手に死ぬ権利なんざねえんだよ！ …… そんなに死にてえならな、悲劇くらいしつかり乗り越えてから死にやがれ！」

「うるさい！ 黙れ！ 耳障りだ！」

ダガーが要の身体に無数の傷をつける。それでも、要は動かさず叫

ぶ。

「いい加減目を覚ませよ。お前はこんな奴に屈するような人間じゃないだろ。八神はやて！」

ここにきて初めて要が動き出す。

血の雨降り注ぐ中、一瞬の迷いもなく真っ直ぐに管理人格へと、全身のバネを使って跳ぶ。

右手を固く硬く堅く、それこそ血が出るほどに握り締め、管理人格の頬目掛けて筋肉を爆発させるように動かし、重い拳を放つ。

メゴツッ！ と鈍い音と共に要に頬を殴られた管理人格は地面へ真っ直ぐに落ち、身体を数回バウンドさせてからようやく動きを止める。

直後、動かなくなった管理人格の身体が光り輝き、それが五つの光の球へと分裂し、それぞれが強く輝きを放つ。

「ッ………！」

光源のすぐそばにいた要は思わず目を瞑り、それでも刺激の強い光に耐えられず両手で目を覆うようにして保護する。

光は数秒で収まり、五つの球だったものはそれぞれが人の形へと変貌する。

『我ら、夜天の主の下に集いし騎士』

『主ある限り、我らの魂尽きる事なし』

『この身に命ある限り、我らは御身の下にあり』
『我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に』

「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風、リインフォース……セツト、アップー！」

そこには、主を守るように、敬うようにウォルケンリッター跪く守護騎士と、

女神のような、それでいて強かな笑みを浮かべた八神はやての姿が。

「……随分と寝坊したじゃないか」

「ごめんな要君。でも、あの子　いや、リインにも事情があったんや」

「……そうか。まあいい」

要はそこで言葉を切り、遙か遠くの海の方を見る。

そこには、どういう原理で分裂したかは分からないが、どす黒く、それでいて巨大な闇の球が浮かんでいた。

「要君。アレがこの『夜天の書』を『闇の書』とした原因　バグを起こした防衛プログラムや」

はやてが闇の球の説明をした直後、それが空中でパチンと弾け、歪な姿へと変貌した。

「……あれを除去する方法は分かるか？」

「私でも分からへん。何せ『魔法』なんて今始めて触れたんやから」

「……そうか。なら、その道の人を呼ぶのが早いだろう」

流石にここまで騒ぎが大きくなれば、『あの二人』が出てこないはずがないが、と要は考える。

「要君、上！ 上！」

はやてが空に何かを見つけたらしく、しきりに要に上を見るよう促す。

要が上空を見上げ、そして同時に薄く笑う。

「……何だ、呼ぶ必要はなかったじゃないか」

上空にいたのは、深夜にも拘らず凜とした目つきなのはとフェイト。

遠く海の方で、防衛プログラムが雄たけびを上げた。

「……始まったな」

『ああ、始まったな』

「出来れば俺が出る幕がなけりゃいいが」

第14話 早すぎた覚醒 (後書き)

今回は無理やり感が否めない。てか要君リイン殴っちゃってるし。あんだどこのイマジンプレイカーだよ。

今回はあとがきコーナーは無しで。ではお休みなさい。

第15話　アースラ搭乗

なのは達が要達の下に降り立って最初にとつた行動は驚愕だった。

何せ、今まで普通の人と何ら変わりなかったはやてが『魔法』と
いう言葉を使い、またそれを実現させるための装備　デバイス
も持っている。

「は、はやてちゃんも魔導師だったんだ……」

「ま、魔導師？ 何やそれ？」

「……簡単に言えば魔法が使える奴の事を指す。ついでにその二人もだ」

三人の少女達はさっきから驚くという行動しかとっていない。

それもそうだろう。お互いにお互いが普通の女の子だと思っただのだから。

「そついえば要君」

「……何だ」

しばらく談笑をしていたはやてが突然要の方を向く。

「見てたで、全部。私のためにあそこまで頑張ってくれて……ありがとう」

「……『私のために』なんて自分を下げる言い方はやめた方がいい。俺とお前は対等な立場なんだから」

「要君……」

「……まあ、礼は素直に受け取っておこう」

と、そこでまるでタイミングを図っていたかのようになのはの方からアラーム音が鳴り響いた。

要とはやてが同時に振り向き、なのはは突然のアラームにビク

りしながらもその音源地である小型の通信機を取り出し回線を開く。

通信機の出力装置がいかにも空気の読めなさそうな顔を映し出し、その顔がなのはに向かって口を動かす。

『こちらクロノ！ 今強力な魔力反応がそちらからあったが何があった？』

「く、クロノ君！ えっと」

なのはがクロノに事情を説明し、クロノがそれに頷く。

「『闇の書』……か。とりあえず、はやてと言ったか？ その子を連れて一度アースラに来てほしい。色々聞きたい事がある」

クロノと名乗った少年はそれだけ残すと通信を切ってしまい、僅かに沈黙が流れる。

「……え、えっと。そういう事だから私についてきてくれないかな？」

なのはがやや遠慮しがちにはやてに同行を求める。

「私は別にええよ。要君はどうするの？」

そう言えば先ほどの通信に俺の名前はなかったな、と要が呟き、僅かに沈黙。やがて口を開き答えを出す。

「……同行しよう」

なのはが通信機を使いどこかに連絡し、その数分後、四人が海鳴から姿を消す。

地上遥が高く、雲の上に立っていた髪の長い少年が、拳を握り締めながら呟く。

「……ちょっとあのネコモドキ殴って来たいんだけどいいかな？」

『物語には関与しないんじゃないのか?』

彼の言う『ネコモドキ』というのが何かは分からないが、どうやら相当に頭にきているらしい。額に井の字が浮かび上がっている。

「ちくせう……今すぐにもコンクリ詰めにして海に放り捨てたいんだが……」

『君の発言にはいちいち驚かされるよ』

神がやれやれと肩をすくめる。

「まあいいや。どうせこの後ストレス発散出来るんだし」

少年は今もなお海の上で蠢く防衛プログラムを見て、ぼつりと咳いた。

「……今すぐにもぶっ放してえ」

気がつくとも要達は大きなロビーにいた。どうやら『アースラ』に着いたらしい。

なのはとフェイトが先導し、無機質な床を歩く。

五、六分ほど歩いた後、終着点である一枚のドアを指差しなのはが言う。

「ここがブリッジだよ。クロノ君……さっきの人ね。あの人はここにいるの」

ドアが自動で横にスライドし、奥に広がる空間を四人が歩く。

視界の端にチラリと『和室』と書かれた札が見えた頃、例のクロノという少年が近づいてきた。

「ようこそアースラへ。君が八神はやてだね？」

「ええ、はい」

クロノに突然に名を呼ばれ、ややしどろもどろになりながら返答するはやて。

「と……君は、誰だい？」

「……はやての付添人だ。気にする必要は無い」

一瞬ジロリと睨み付けられた要だったが、涼しい返答を返す。

「……所で、あの防衛プログラムはどうする気だ。あのまま野ざらしという事はないのだろうか？」

「それは現在作戦を立てている最中だ。解析した所、ただ撃つだけじゃすぐに再生するし、いくつかの障壁もあるそうだ。素早く、それでいて強力な攻撃を仕掛けないとならない。……こっちへ」

クロノは喋りながら歩き出し、四人がその後を追う。

目の前に迫るのは『和室』と書かれた部屋。

「よく来たわね皆。私がこのアースラの艦長、リンディです」

和室に案内された四人は、中で正座していた緑の髪をした女性に丁寧挨拶をされ、それぞれがまばらに返す。

「なのはちゃんにフェイトちゃん、久しぶりね」

どうやら二人は顔なじみらしく、それぞれがはきはきとした返事をした。

「立っているのも疲れるでしょうから座って下さい。お茶はいりますか？」

『お茶』という単語にいち早く反応したのはフェイトは、どこか苦い顔をしながら『いえ、いいです』と返した。はやても二人の顔を見て何かマズイ想像をしたらしく二人と同様の答えを返す。

「……頂う」

ただ一人、要を除いて。

リンディは満足そうに頷き、お茶の準備のためどこかへと去っていく。彼女の姿が見えなくなった直後、なのはとフェイトが要に詰め寄った。

「要君、別に断っても良かったんだよ？」

「そ、そうだよ！ わざわざ『アレ』を頂こうなんて……！」

「……丁度喉が渴いているんだ。別にいいだろう」

「……その言葉、後できっと後悔する事になると思うの」

なのはの含みのある言い方に要はハテナマークを頭上に浮かべたが、恐らくお茶の入っている急須と湯飲みをいくつかお盆に載せて持ってきたリンディが現れたので思考を中断する。

リンディは丁寧に急須から湯飲みへお茶を注ぎ、およそ一般的な茶葉からは匂わないような高級感漂う湯飲みを要に差し出すかと思われた。

お茶を注いだ所でリンディは急須に隠れて見えなかった『角砂糖』を、とんでもなく多量にお茶に入れた。

「……？」

要はその行動に不審を抱いたが、まあ、飲めればいいかと樂觀的だ。

「どうぞ」

先ほどの高級そうな茶葉の香りはもうなく、代わりに甘ったるい匂いのする湯飲みを差し出され、要は両手でそれを持ちお茶に口をつける。

並の人間ならむせ返り、とても飲める程のものではないそれを、要は無言で飲んだ。

なのはとフェイトは驚きを隠せないでいるようだ。一瞬要の事を『とても人間とは思えない』と思ってしまったほどに。

要はお茶を少し飲み、それから湯飲みを和室らしい畳に置いてから感想を口にする。

「……糖分が多いな。少し辛味か苦味がほしい所だ」

「あら、そうですか？ 私はこれでもまだ足りないんですが」

と言いつつ角砂糖を湯飲みの中に投入する手を休めないリンディ。彼女は一体どれ程の糖分をお茶に混ぜたのか　彼女以外は知り得もない。

彼女のみが作り出す魔のお茶。

人はそれを畏怖と尊敬をこめてこう呼ぶのだそうだ。

リンデイヤ茶と。

第15話〜アースラ搭乗〜（後書き）

今回も力尽きたのであとがきコーナーは無しにしようかと思いましたが、うれしいことに質問が来ていたのでそれだけお答えして今回は終わりたいと思います。

質問『要君も「彼」みたいにチートなのですか？片鱗とか言ってたし一応』

要君はチートと言いますか、何と言いますか。

ヴィータの攻撃食らえば肋骨折れますし、かといって地味だったけどフェイトを一撃で倒したり、と色々と極端な面があったりします。

防御面だけ見ればチートじゃないですが、攻撃力ならチートでしょうね。そのうちビルとか拳一つで倒壊させかねない。

第16話 闇の書の終わり

少しの休憩をとった要達は和室から移動し会議室と呼ばれる所に
来ていた。

今もなお暴走しかけている防衛プログラムの対処を考えるためだ。

「防衛プログラムを破壊、もしくは封印する方法はある」

クロノがそう前置きし、皆の視線を一身に集めながら己の考えた

案を説明する。

「一つ。高威力の氷結魔法で凍らせる。二つ。このアースラに搭載されている『アルカンシエル』……これを防衛プログラムに撃ち、近くの次元ごと歪めて消滅させる」

「……最初の案は現実的ではないな」

「次元ごとって……そんな事したら町が消えちゃうの！ 絶対ダメなの！」

氷結魔法を使ったとしても、恐らく内側から再生されればそれまでだ。

アルカンシエルを使うにしたって、周りへの被害が大きすぎる。とてもじゃないが使えるものではないだろう。

クロノ、フェイト、なのは、はやてが頭を抱えて悩む中、要はいつも通りの無表情で俯き、腕を組んで何かボソボソと高速で口を動かしている。作戦を考えては却下を自分の中で繰り返しているのだろう。

二、三分程沈黙が流れ、何かを思いついたらしい要が顔を上げる。

「……そのアルカンシエルはどこにでも撃てるのか？」

「どこにでも？」

「……そうだ。例えばこのアースラのいる軌道上。宇宙空間に」

「宇宙空間……！」

「管理局の技術で出来たこのアースなら、それくらい何てことは無い」

「でも防衛プログラムはコアがある限り無限に再生するんやで？
それに魔力障壁と物理障壁が重ね重ねで張ってあるんや。アルカン
シエルでもそれを打ち抜くのは厳しいんやないか？」

要の言葉に歓喜の感情を浮かべた四人だったが、はやての言葉に
より再び顔が曇る。

「……障壁があるならばち壊せばいい。なのはの砲撃は、シグナム
達の剣は飾りだとも？」

「そ、そうだよね！ 障壁なんてぶち壊しちゃえば万事解決なの！」

かくして、防衛プログラムを消滅させる作戦が出来上がり、
実行すべく五人が再び海鳴へと降りる。

防衛プログラム暴走まで、後七分。

海上で蠢く奇怪なオブジェのような防衛プログラムの姿に顔を歪ませながらも、アレを軌道上に転移させアルカンシエルで打ち抜くという作戦を海鳴に残っていた他の人達に伝える五人。

「……つまり？」

「私たちが障壁を壊し」

「僕たちがコアを転移させて」

「……それをアルカンシエルで消滅させる。簡単な作戦だろう」

物理障壁、魔力障壁、物理障壁、魔力障壁の四枚構造の障壁を各々で打ち砕き、防衛プログラム本体になのは、フェイト、はやてが砲撃で穴を開け、コアが見えたらそれをユーノとアルフが宇宙に転

送しアルカンシェルで蒸発させる。

簡単なようでとても難しい事だった。

なのは達が砲撃を撃つ前に障壁が復活すればそれまでだし、少しでも転送が遅くなればプログラムは即座に再生を始めてしまうだろう。

「ギャンブルのような危険な賭けだ。……が、悪くは無い」

クロノがカードを目の前にかざす。

するとカードは一瞬青い光を発し、少し短めの杖型デバイス『デュランダル』へと変化した。

「……計算上は出来るらしい。なら、実現するのは俺達だ」

要が拳の具合を確かめるように握ったり開いたりを繰り返す。

「　　終わらせるで。闇を」

はやてが決意の籠った眼差しでプログラムを視界に入れ、その数秒後、プログラムが暴走を始めた。

「チェーンバインド!!」

「ストラクルバインド!!」

ユーノとアルフがバインドを鞭のようにならせ、プログラムから生えていた触手を切り落とす。

プログラムは突然の攻撃に驚き、また怒りの声を上げる。

プログラムが行動する前に、ヴィータとなのはが最初に攻撃を開始する。

「ちゃんと合わせるよ、高町なのは!!」

「ヴィータちゃんもね!!」

ヴィータが己の武器、グラーフアイゼンを持つ手に力を込め、カートリッジをリロード。

ヴィータの闘志に呼応するようにグラーフアイゼンが大きくなり、また柄の部分が天高く伸びる。

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーフアイゼン!!」

頭上に振りかぶったそれを、防衛プログラム目掛けて振り下ろす

!

「ギガントお！ シュラアアアアアアアアアアク！！」

肥大化したグラーファイゼンが防衛プログラム目掛けて一直線に振り下ろされ、攻撃を阻まんと張られていた障壁が呆気なく崩された。

プログラムが苦悶の悲鳴を上げもがく。

「高町なのはと、レイジングハートエクセリオン！ 行きます！！」
間髪いれずなのはが叫び、またレイジングハートを前方に構える。

カートリッジが四発も排出され、あまりの魔力量に彼女の魔力光である桜色が漏れ出し幻想的な風景を醸し出す。

「エクセリオン、バスタアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

危険を察知したプログラムが細い触手をなのはに向けて伸ばすも、それはなのはの砲撃によって呆気なく崩される。

放たれた極太の桜色がプログラムの障壁を一瞬にして粉碎する。
プログラムが自分の思い通りにならず、うめき声を上げた。

そして、背後から殺気を感じたプログラムが振り返ろうとするも、ダメージが蓄積していたせいで思うように動けない。

「 剣の騎士、シグナムが魂。 炎の魔剣『レヴァンティン』」

シグナムが己の武器の名を呼びながら、剣と鞘の柄を合わせ、それを眼前で構える。

剣と鞘が合わさったその形は、弓。

「刃、連結刃に続くもう一つの姿」

魔力で形成された矢を弓につがえ、限界まで引き絞り、放つ。

「駆けよ、隼！」

音を置き去りにした矢が神速でプログラムの障壁に当たり、爆発を起こす。

「フェイト・テストロッサ、バルディッシュザンバー！ 行きます！」

雷の大剣を両手に持つフェイト目掛けてプログラムの触手が襲い掛かった。

「撃ち抜け、雷刃！！」

触手がフェイトに触れるよりも早く、天を貫く大きさのフェイトのバルディッシュがそれを切り裂き、障壁すらも真つ二つに両断した。

プログラムが怒りに身を任せ、触手から砲撃魔法を放たんと魔力を込める。

だが、それを見過ごす者はいない。

「盾の守護獣、ザフィーラ！ 砲撃なぞ撃たせん！！」

言葉と共に触手が無数の青き刃に貫かれ、両断。とても砲撃を撃てるような状態ではなくなつた。

が、たった一本、ザフィーラの刃を掻い潜つた物があつた。

「！ フェイトちゃん！」

なのはがそれに気づき叫ぶ。ザフィーラが触手を切り落とそうとするが、それよりも早く砲撃が放たれる。

高速で放たれたそれはフェイトが避けれるようなものではない。確実に直撃コースだった。

「……ッ！！！」

フェイトがこれからの事態を予想し目を瞑つた。

瞬間、隣を一陣の風が吹き抜ける。

「……え？」

突然吹いた風に驚きフェイトが目を開けると、そこには砲撃に向かってまっすぐに突き進む要がいた。

「か、要君!？」

身代わりになるうとでも言っつのか、要の無謀な行動に誰もが驚く。

だが、要とて何も考えなかったわけではない。

硬く握り締めた右拳が、薄い魔力光で包まれていく。色は紅蓮。

「
おおおおおおおおおおオオオオオオオオオオあ
ああああああああ!!」

絶叫と共に、それを砲撃に向かって突き出す。

すると砲撃は要の拳に当たった位置からさけるチーズのように四方八方に散らばっていった。

「防御は気にしなくていい。さっさと撃て」

要の言葉に各々が頷く中、最後の障壁を破らんと進み出たのは八神はやて。

「 彼方より来たれ、ヤドリギの枝！ 撃ち貫け、石化の槍
ミストルティン』！！」

防衛プログラムの身体の斜め上から無数の白銀の槍が降り注ぐ。

プログラムに当たった槍は次々と侵食を始め、あっという間に全身を石と変えてしまった。

だが、即座に内側から再生を始めてしまい、石化した身体の下から新しい身体が現れた。

そして新しい身体が猛威を振るう前に 一瞬にして凍結。再び身体が崩壊する。即座に復活。

だが、それを見てもなのはは驚かず、ただ静かに告げる。

「行くよ、フェイトちゃん！ はやてちゃん！」

なのはの呼びかけに二人が応じ、それぞれの武器を構える。

なのはもレイジングハートを眼前に腰溜めで構え、己の放てる最大の魔法を放つために魔力をかき集める。

「行くよ！ 全力全開！！ スターライトおおお！！」

フェイトが大剣を両手で後ろ手に持ち、力を込める。

「雷光一閃！ プラズマザンバあああ！！」

そしてはやては、魔力を集めながら暴走した防衛プログラムを静かに見つめる。

「…………ごめんな。お休みな」

その言葉が防衛プログラムに届くかは分からなかった。

ただ、謝礼と感謝の気持ちと同時に溢れ、自然と言葉を口にしていたのだった。

防衛プログラムは最後の悪あがきとばかりに無数の触手を三人目掛けて伸ばす。

だが、眼前に立ちほだかる要がそれを許さない。

「……………」

要はまるで剣の柄でも握っているかのように両手を交互に丸める。

要が精神を集中するために一瞬目を閉じ、キッと開けば、手の中に紅蓮に燃え盛る巨大な紅い剣があった。

魔法。それも、デバイスなしでの。

迫る触手に怯えもせず、要は静かに紅い剣を、まるで剣道のように

に頭上に振りかぶる。

「……劫炎」

そして、それを触手目掛けて無慈悲に振り下ろす。

「――閃ッッ!!」

吹き荒ぶ熱波と紅い剣本体に切られた触手が宙を舞い、同時に一瞬にして炎に包まれ消え去る。

「……今だ、やれ!」

要が叫び、同時に三人の砲撃魔法の射線上から外れるべく空を駆けた。

「響け、終焉の笛！ ラグナロク！！」

要が脱出した直後、なのは、フェイト、はやての三人のチャージが終わり、それぞれが己の意志を乗せた砲撃を放つ。

『ブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアアアああああああああああああ！！』

三点から雷、桜、白銀の砲撃を受けた防衛プログラム。当然無事なはずがない。

砲撃の爆発によって煙が舞い上がる中、シャマルが静かに告げる。

「本体コア露出……捕まえ、た！」

シャマルが防衛プログラムのコアを捕らえ、同時にユーノとアルフが叫ぶ。

「長距離転送！」

「目標、軌道上！！」

『転送！！』

強制転送の対象となったコアが空を飛び、一直線に軌道上へ移動する。

防衛プログラムは必死に自分の肉体を再生させようとするが、も

う遅い。

既にアルカンシエルは、発射可能状態にあった。

「アルカンシエル、発射！」

アースラの中、発射キーを捻りながらリンデイが叫ぶ。

周囲の次元を湾曲させ消滅させる滅びの一撃が防衛プログラムへと迫る。

防衛プログラムが最後に何かを叫んだが、宇宙空間に音を伝えるものはない。

直後、防衛プログラムにアルカンシエルが当たり、白銀の光を撒き散らした。

第16話 闇の書の終わり (後書き)

今回もあとがきコーナーは無しで。ごめんなさい。

そして今話はかなり無理がある……今までカートリッジなんて一言も使っていないしアルフに会っていないしデバイスの声入れてないしあーだこーだうだー。

……重い物を締めても切れない縄、どこにあったかな。

第17話 防衛プログラムの最後

『どつやらやったみたいだな』

防衛プログラムの末路を見ていた神が呟く。

「そうだな。『本来なら』……」

髪の長い少年が目を細め、含みのある言い方で神に返す。

『……まさか物語が改変されるとでも?』

「さあ? どうだろうな」

核心を突かない少年の言葉に神は訝しげにするも、

『まあ、すぐに分かる話か』

そう言って空を見上げた。

はるか高く、少年達よりも高い軌道上、蠢く何かがあった。

「そん、な……」

リンディがその場に崩れ落ちた。アースラの艦内を重い沈黙が包み込む。

「外れた……？」

いや、確かにアルカンシエルは当たったはずだ。

ならば、あれは幻か？

軌道上、そこには防衛プログラムが軟体動物のように蠢いていた。

そしてそれは今は肉体の再生に努めている。

アルカンシエルは当たった。だが防衛プログラムは生きている。

「アルカンシエルを凌いだと言うの！？」

単純に防衛プログラムの方が勝っていたという事か。

アイスラのクルー達の顔に絶望が浮かぶ。

誰かが『もう駄目だ』と言った。それを咎める者は誰もいない。

モニターに映された防衛プログラムの目が、アイスラの方をギロリと睨み付けた。

「ほらやっぱり。原作よりタフになってるみたいだな」

髪の長い少年が呟く。

「やっぱり俺のリンカーコア食わせたのは駄目だったのか……？
いやでもコアにそんな力あるとは思えないし……」

しばらくぶつぶつと呟く少年だったが、どこからか念話を受け取り即座にそちらに意識を移す。

(親父、俺だ)

(はいよ、こちら一回限りのお助けコールセンター。ご用件は？)

(……リンディから失敗の報告を受けた。防衛プログラムはまだ生きてるらしい)

(そうだな。俺も見てた)

(……見てたのなら、俺が言いたい事は分かるな？)

(はいはい。三分待つてな。ちょっと『消滅』させてくるから)

最後に物騒な言葉を流しつつ念話を一方的に切る少年。

『……行くんだね？』

「おつともさ。転送よろしく」

『人使いの……いや、神使いの荒い人間だな君は』

「生涯神を顎で使う人間なんて俺一人だな。よく覚えとけよ」

神が指をパチンと鳴らす。

同時に少年の身体が一瞬にしてそこから消えてなくなった。

『……さて、そろそろ君の力も見せてもらおうじゃないか』

神のそんな呟きは、誰にも届かない。

防衛プログラムの肉体が高速で再生していく。

そして終始アースラを見ている事から、再生した直後襲われるのはアースラだろう。

葬式のような雰囲気のアースラ艦内。

「……アルカンシエル、もう一発撃てない？」

リンディの最後の悪あがきは、クルーの『無理です』の一言で両断される。

あれほどの一撃という事は、すなわちチャージにも時間がかかるものだ。どう考えても防衛プログラムが回復する前にもう一度撃つ事は出来ない。

絶望的な環境。リンディの口から乾いた笑みが零れた。

防衛プログラムが肉体を再生し終え、直後に触手から砲撃魔法を放つ。狙いは当然アースラだ。

一発や二発で沈むような艦じゃないが、このままだといずれ墮とされるだろう。

死を覚悟したリンディが、静かに目を閉じた。

が。

いつまでたっても、『死』が訪れる事はなかった。

「……？」

リンディが思わず目を開けた。

「……艦長」

誰かが彼女を呼ぶ。

「信じられません……!!」

違うクルーが振り絞るように叫ぶ。

アースラのモニター 防衛プログラムが映されているその画面には、先ほどとは違う『何か』がいた。

「モニター拡大します!」

クルーの一人がコンソールを素早く打ち、拡大された画面を映し出す。

「……な……!?!」

そこに映っていたものを見たリンディは絶句した。

空気などないのに、黒く、艶やかな腰まで伸びる髪をなびかせ、
防衛プログラムの砲撃を片手ではじく『人間』がいた。

宇宙空間に人間。絶対に有り得ないこの組み合わせが、リンディ
の頭を混乱させる。

その人間は後姿のみしか映っておらず顔を見る事は出来ない。

彼は、いや、『彼女』かもしれないが、あれは一体何者なのか？

艦内のクルー全員が疑問に思う。

『……あー、あー。てすてす。聞こえてますかーアースラさんよ』

と、突如艦内に声が響き渡る。男にしては高く、女にしては低い
アルトボイス。

『えー、どうも現在戦闘中の俺ですよっと。うわっ！ ちょ、やめ
！ 触手やめい気持ち悪い！』

モニターの中の人間に防衛プログラムの触手が襲い掛かったが、
少年が軽く手を振るだけで原子レベルまで分解される。

『遊びたいなら後で遊んでやるから待ってるっての……で？ 聞こ
えたら返答をどうぞー』

やけに間延びした、それでいてふざけた声音。

まるで子供向けのおもちゃを与えられた大人のように余裕のあるその声は、リンディに安心感と同時に恐怖感を生み出させる。

『あれ、もしかして声聞こえてない？ 参ったな……これ結構しんどいの聞こえてないとか意味ねえじゃ砲撃すんな気色悪い！ 生理的に受け付けられないんだよお前』

何人もが束になってかかってようやく瀕死に追いやった防衛プログラムに対し、その人間は一人で、それも片手間で対処していた。どう見ても異常だ。

『あー、H Q？ H Q？ あれ、これ違ってたっけか。まあいいや。今からコイツ倒すからそこで見てな』

声はそれきり聞こえなくなり、艦内に不気味な静寂が残った。

「さて、と」

少年は目の前でうごうごと動く防衛プログラムを見上げた。

少年の身体の数十倍は大きい。

「えーっと……八卦炉八卦炉……あつた」

防衛プログラムの触手を打ち払いながら、砲撃を片手で弾きながらポケットから八卦炉と呼ばれるアイテムを取り出す少年。

防衛プログラムがいつまでも成功しない自分の攻撃に苛々した声を上げる。

「いいから黙ってるっての」

少年が防衛プログラムに手をかざす。

たったそれだけの動作で、防衛プログラムの肉体は見えない強力

な力に縛られ動きを止める。

少年が八卦炉を両手で眼前に構え、魔力を込める。

「さて……どれくらいまでいけるかね」

キイイイイイ、と八卦炉から悲鳴のような音が鳴ると同時、溜め込む事の出来なかった灰色の魔力光を撒き散らす。

防衛プログラムが、八卦炉にどれだけ魔力が込められているのかを察知し抜け出さんと暴れもがくが、効果はまるで無かった。

爆発的に込められた魔力に八卦炉が、いや、周囲の次元が悲鳴を上げる。『次元震』の起きる予兆だ。

「つとと、そろそろ限界かね」

がたがたと小刻みに震えだした八卦炉を見て魔力を込めるのを中断する少年。

「おっし。じゃ発射五秒前ー。ごーよーんさーんにーぜーろー」

理不尽な数え方のカウントダウンがゼロになった瞬間、限界まで込められた魔力が一点に集中し防衛プログラムへ放たれた。

その大きさは、先ほどの三人の砲撃魔法とアースラのアルカンシエル二倍にして繋ぎ足してもお釣りがくる程の大きさ。

極大の『死』という単語を具現化した灰色の光が防衛プログラムを貫き、呑み込み、奔流に流し、消滅させた。

『死』はそれだけでは飽き足らず、射線上にあったいくつかの無人世界を呑み込み、またそれを原子すら残さず文字通り消滅させる。

当然、防衛プログラムが生き残れるはずはなかった。

その灰色の光は地上からも見る事が出来た。それ程の大きさだったのだ。

「な、何なのアレ!？」

なのはが叫ぶ。当然だ。彼女の全力全開のスターライトブレイカーだっであんな事にはならないだろう。

様々な人がうるたえ、狼狽する中、要はいつまでも要らしく無表情だった。

「……やり過ぎだ」

そんな要の独り言は、騒いでいる少女達に聞こえるはずもなく。風に流され消えていった。

第17話 防衛プログラムの最後 (後書き)

? 「今回だけは俺のターン」

神 『実は私も頑張った』

一番頑張ったのは私! それでは始まりますよ!

『ずっと作者のたーん! のこおなあー!』

まず最初に。ドリ符『信頼と実績の金ダライ一点集中型』!

? 「(ゴゴゴゴコンッ) おっふ」

神 「まあそうなるのは当然だな。正直やり過ぎだろう」

そんな少年君は無視しといて。灰音様、いつも感想ありがとうございます。
ざいます。

? 「よく飽きないよなーこんな小説に」

ドリ符 『信頼と実績の』

? 「ごめん。それだけはやめて。それ絶対命中だし絶対ダメージは
いるんだよ」

神 「それではここら辺で終わるとしよっ」

それではまた次話で。

第18話 管理局への勧誘、散るは祝福の風

「……」

「……」

アースラの和室、畳の上に正座でお互いに見つめあう
く言えばにらみ合う 人が二人。

細か

一人は緑髪の女性、リンディ。

そしてもう一人は、防衛プログラムを一瞬にして葬り去ったあの髪の高い少年である。

防衛プログラムを文字通り『消滅』させた少年はその後一瞬にしてアースラのブリッジに転移、色々と一悶着あったが、落ち着いたところで会話がしたいとのリンディの提案によりここに来ていた。

「…………お茶淹れますか？」

「お願いします」

リンディの提案に少年が短く答え、お茶を淹れにリンディが和室からいなくなると同時、少年が力尽きたようにその場に横倒しになる。

「だー…………お見合いじゃないっつのに何であんな正座してたんだかおかげで足痺れちまった…………」

少年がうずくまり足の指先をつんつんと手でつつき、同時に強い痺れが伝わりビクンと身体を震わせる。微かに目に涙が滲んでいるあたり結構辛いのだろう。

「うう…………やっぱり大人しくしてりゃよかった」

『君が選択した事だろう？ 後悔するより前に進んだらどうだ』

突如和室に声が響き、同時に畳の下からにゅると黒いフードが出現する。

「うお、いきなり出てくんなし」

少年は突然ホラー映画の幽霊のように出てきた神にさして驚く事もせず普通に声をかける。

『もう少し驚いてみたらどうだ?』

「お前がいる事で既に驚く事なのに今更演出ごときで驚くかっての少年はそこでふと別の気配を感じ会話を中断。正座はもうやっつけられないので胡坐をかいて座る。

そしてちよっとしてリンデイが湯飲みを二つと急須、それに角砂糖の入ったカップをお盆に載せて和室へ戻ってきた。

リンデイが慣れた手つきで急須から湯飲みにお茶を移し、そしてそこに角砂糖を多量に投入。少年の顔が僅かにしかめっ面になったのはどうやら気づいていないらしい。

「どござ」

「……どうも」

差し出された湯飲みを両手で持ち、それを口元まで持ってきてから動きを止める少年。

(待てよ。もしこれ飲んだらどうなる? 糖尿病? 糖尿病
まっしぐらなの? こんな歳で糖尿病とか嫌なんだけど……まあ、
飲まないといけないのかね)

小さくため息を吐き、そして諦めたようにグイッと湯飲みを傾けもはや『熱い砂糖』としか呼べないそれを口に含む。

瞬間、少年の身体が硬直。

「……」

「あら、どうかしましたか？」

少年の突然の変化にリンディが疑問を口にする。だが少年はそれには答えず、石のように身体を固まらせたままだ。

「……リンディさんだったか。砂糖入れすぎとちゃいますか？」

「そうですか？ 皆そう言いますが私としては足りないんですよ」

片手を頬に添えて上品に笑いながらも片方の手で角砂糖を無数に湯飲みにぶち込むリンディ。その表情はどこか楽しげだ。

「……何故糖尿病にならないし」

思い出したくも無い糖分の量、このお茶一杯で軽く病気にかかってしまうだろう。もしかしたら死人が出るかもしれない。

「とりあえずこのお茶はほかの人には勧めないように。その人の人生を潰したくないからね」

少年がかなり苦しい声で話し、リンディはどこか納得いかない様子でそれを承諾した。

ここまで来て、異変を感じた人はいただろうか？

つい先ほどここには少年が神と呼ぶ者が現れ、神は今もなお二人の会話を『すぐ隣で』聞いている。

だが、リンディがそれに気づいている様子は無かった。

見えないのだ。少年以外には。

『……そもそも私が見えるという時点で異常なのだがね』

神が小さく独り言を漏らした。

唯一見えている少年はリンディとの会話で忙しいらしく、その一言に言葉を返す事は無かった。

「さて。そろそろ本題と行くこうじゃないか」

ふと少年が呟いたその一言に、一瞬にして和室の空気が一変する。

「ええ。勝手でしたが先ほど貴方の魔力を測定させていただきました」
リンディが手を動かすと、その軌跡上にいくつものモニターが現れそれぞれがそれぞれの情報を映し出す。

「先ほどの砲撃魔法……私たちの力では測る事が出来ませんでした」
アースラ、いや、管理局で測定出来る魔力ランクの最大値は『SS』。一人いれば国の一つや二つ簡単に落とせる程の魔法を扱う事が出来るランクだ。

そしてこの少年の先ほどの砲撃魔法は、そんなとてつもない強さすら超えていた。

化け物。リンディの脳裏をそんな言葉が掠める。

「やっぱ測れないか。まあしょうがないねー。そもそも測れるようなランクじゃないだろうし」

軽い口調の少年。だが、口から吐き出される言葉はとてつもなく、そして途方も無い事だった。

「あ、ちなみに『全力』を測ろうとしたら測定器がイカれると思うからやめときなよ」

この少年はあれほどの魔法を使っておいて全力ではなかったと言うのか。リンディはこのあっけらかんとする少年に恐怖を抱く。

だが、それほどの少年が自分たちの味方になったとしたら。

緊張して乾いた喉を唾を飲んで僅かに潤し、リンディが知らず知らずのうちに震えている声で少年に話す。

「……貴方の目的は？」

「あん？ 目的だったって……助けたかったから助けた。これしか言えんな」

助けたかったから助けた。この少年は案外お人好しなのか？リンディが頭の中で考えるもそれを口に出す事はしない。

「そう。話は変わるのだけれど、貴方見た所働ける年齢のようだけど……職に困ったりしていないかしら？」

「ん？ んー、仕事ねえ。今は何もやってないけど」

これほどの力を持っていてフリー。ならば、勧誘しない手は無い。

「ならここで 管理局で働いてみない？ 貴方ほどの人ならぜひ局に欲しいし、何より人手が足りないのよ。どうかしら？」

とそこで少年が僅かに顔を歪ませた。失敗したか、とリンディが内心焦る。

「あー……うん。嬉しいけどさ、俺ちよつとやらなきやいけない事あるのよ。だから今は無理。二、三年待つてくれりゃいいよ」

少年の少し気まずそうな言葉を聞いた直後、リンディの焦りは一瞬にして喜びの感情に塗り替えられた。今すぐには言わなかったが、たった数年待つただけでとてつもない力を持つ魔導師が入局するのだ。戦力が一気に増強される。

「いい返事をありがとう。入りたくなったらここに連絡して頂戴」

少年に自分の連絡先を伝え、顔に笑みを浮かばせないよう注意しつつ内心で喜ぶリンディ。

「じゃ俺はここら辺で。お茶美味しくなかった、しばらくは飲みたくないね」

最後にやや憎まれ口を叩き、少年の足元に魔方陣が浮かび上がったかと思うと一瞬にして少年の姿が掻き消えた。転送魔法を使ったらしい。

一人和室に残されたリンディが、両手で握っていた砂糖だらけのお茶を啜った。

海鳴の空、全てを見下ろせるほどの位置に神はいた。

相変わらず全身を黒いローブですっぽりと包み込み、その姿、顔、表情は一切誰にも見えない。

『……………来たか』

神が呟くと同時、右隣に突然髪の毛の長い少年が現れる。前触れと呼べるものは一切なかった。

「っと、とと……よし着地成功。あ、ここ空か」

転移すると同時、空でバランスをとるためにやや足を動かし、丁度いい位置で足を止める少年。

「いやあスカウトされちまったぜはっはっは」

『静かに。それよりも……始まるぞ』

「え、俺無視？ まあいいですけどさ」

神が右手の平の裏側をスツと前に出し、そこから突然ガラスで出た球が現れる。

球の中では銀色の髪を風になびかせ、全てを悟ったような、優しい笑みを浮かべている管理人格　いや、リインフォースと名付けられた人が映っていた。口を動かしているのに言葉は聞こえない事から、どうやら音声は拾えないらしい。

「……………」

鏡のように透明な球に映るリインフォースを見た少年は、いつかのように拳を強く握り締め真剣な目つきでそれを見る。

『前にも言った事があったが、助けに行きたいなら助けに行けばいいだろっ？』

「前にも言った事あるけど、助けに行きたくても行けないのさ」

この先の展開を知っている少年は、彼女が何をしようとするのかを知っている。

闇の書の防衛プログラムは永遠に再生し続ける。それは、またいつ『悲劇』を繰り返すかも知れないのだ。

だから、主はやてから切り離す。リインフォースという管理人格と一緒に。

「……なっさけねえ」

少年のその言葉は一体誰に向けたものか、それは近くで聞いている神は分からなかった。

少しズームアウトすると、リインフォースを挟むようにフェイトとなのはが隣に立ち、正面から神楽要が静かにリインフォースを見つめていた。

その目は『本当に行くのか』とリインフォースに話しかけているようだった。

リインフォースはそんな要の目を見ても穏やかな笑みを崩さず。決意が揺らぐ事は絶対にならないようだ。

要が小さく頷き、どうやらそれが合図だったらしくなのはとフェイトがそれぞれのデバイスを掲げる。

リインフォースが消滅する直前

突如、車椅子を疾走させは

やてが四人へ迫ってきた。

が、どこかで躓いたらしく車椅子から身を放り出されるはやて。それを要が冷静な手つきで受け止めた。

はやてはリインフォースへ近づこうと手を伸ばすが、要はがっちりとしてそれを抑えてしまい動けないでいた。リインフォースの意思を尊重しての行動だった。

要がなのはとフェイトを交互に見やり小さく頷く。二度目の合図になのはとフェイトがデバイスを再び掲げ、何かの魔法を発動した。

瞬間。

リインフォースの身体が銀色の粒子へと変化し、天へ昇っていった。

キラキラと舞い散るその粒子は、どこことなく幻想的で、儚げだった。

「……良き眠りを、祝福の風」
リイン
フォース

少年の労う様なその言葉を、神はしっかりと聞いていた。

第18話 管理局への勧誘、散るは祝福の風（後書き）

早速ですが、灰音様、もみじ様。毎度毎度感想ありがとうございます。大変励みになっております。

すみませんが今回もあとがきコーナーはなしの方向で。申し訳ないです。

第19話 六年後の話

時の流れというのは人を強く成長させる。

八神はやてがリインフォースと別れてから六年。防衛プログラムのバグによって蝕まれていた身体はすっかり快復し今ではしっかりと二本足で地に立つ事も出来た。

そう。六年。

幼かったはやての顔はすっかり大人びた印象の顔つきに変わっていた。

……ただ、どうしても成長しない部分はあったが。そこは彼女の威厳を保つためにあえて何処がとは言わないでおこう。

そんなはやては現在学生だ。当然学校に登校する義務がある。

「ほな行つて来るで。家の留守お願いねシグナム」

靴のつま先で玄関の床をとんと叩きながら、顔だけを後ろに向けシグナムに言う。

「はい。任せて下さい」

笑顔で手を振りながら外へ走るはやてに小さく手を振るシグナム。

と、そんな彼女の後ろから小さな足音がいくつか響く。

シグナムが振り向けば、いつの間にか自分と同じくらいの背丈に成長した紅い髪の少年。

「……む、出遅れたか」

小さかった頃よりも幾分か低くなった声で紅髪の少年こと神楽要が呟く。

「主ならもう行ったぞ？ 追いかけていないのか？」

「……まだ登校時間には余裕がある。走る必要は無い」

「いやそういう意味で言ったわけじゃないんだが……」

冷静かつ素早い動きで靴を履く要。およそ無駄な動きが一切無い洗練されたその動きは、正直今は無駄でしかないだろう。むしろ何故靴履くだけにそんな暗殺者のような身のこなしなのか、シグナムにはさっぱり分からなかった。

「……では、行ってくる」

「ああ。気をつけてな」

「……大丈夫だ、喧嘩を売られるほど目立ってはいない」

今でこそこんな風に普通に登校しているが、昔の要は学校に通う事を嫌がっていた。それなりに勉強していたから通う必要は無いと言って彼らしくもない駄々をこねたりしたのだが、なのは、フェイト、はやての三人の美少女が同時に上目遣いプラス涙目で要に『一緒に学校、行こ……？』なんて言われたもんだから断れる筈も無く最初はサボりがちだったがある日なのはどこかへ連れて行かれて以降すっかりと学校に通うようになった。なのはと何があったかは永遠に謎である。

「手に負えない相手がいれば私に言うの良い。少し灸をすえてやる」

「……そう言って以前病院送りにされた可哀想なヤツがいたんだが」

「最近の若者は軟弱で困る。もう少し手ごたえが欲しい所だな」

一般の学生相手に手ごたえを求めるな、と要がつっこみ、同時に

玄関の扉を開けて外へと出て行った。喋っているうちに時間が危うくなったのか少し慌しい靴音が外から聞こえた。

「全く……平和になったものだ」

ほんの数年前までは闇の書がどうのこうので下手すれば戦争が起きるくらいまでだったのに、今は戦う相手すらいない。このままでは腕が鈍ってしまうとたまに要と強制的に模擬戦をしていたりする。

「まあ、平和なのは良い事か」

シグナムがそう完結し、リビングにいるヴィータに呼ばれ玄関から移動していった。

「……あ、はやてちゃん、要君お早う！」

桜舞い散る歩道で栗色のサイドポニーが揺れる。

「お早うなのはちゃん、フェイトちゃん」

要の隣を歩いていたはやてが二人の姿を見つけ、手を振りながら走り寄る。要はマイペースに歩いているが。

「要君もお早うなのっ！」

「……会話をしている時間は無い。遅刻してもいいなら良いが」

「むー……要君が冷たいの」

要はいつからかなのはに苦手意識を持つようになっていた。なのはにとある所に連れて行かれ色々とされた後からだ。何があったかは彼女の性格を知る者なら誰でも予想がつくだろう。

「……開幕ディバインバスターぶっ放した相手に心を許すとても思っているのか」

「要君が学校行きたくないなんて言ったからなの」

「ま、まあまあなのはちゃん……『お話がしたい』なんて言って砲

撃撃たれたら誰だって怖いよ」

なのはの隣にいたフェイトが宥めるように言う。実際になのはの恐ろしさを知っているからこそその発言だった。少し身体が震えているあたり自分で言っていて思い出してしまったのだろう。

「そつえば要君が学校に来るようになったのって、確かなのはちやんと一緒にいなくなってからやったね。何かあったんか？」

「……はやて。世の中には知らなくて良い事もある」

はやての疑問に要が突如震えだし、口元にまで振動が伝わった結果の震えた声ではやてに諭すように話しかける。

「……いいか。デイバインバスターが来たらチヨン避けなんて考えるな、全力で逃げる。バインドが来たら終わったと考えるんだ」

要がうわ言のようにぶつぶつと呟きだし、はやてはこれ以上この問題につっこむのはいけない気がしたのでここで話は終了した。

歩いているうちに要も平常に戻り、落ち着いて会話ができるようになった頃、道の先でこちらに手を振る人影が二つ。

「あ、アリサちゃんにすずかちゃんだ！」

なのはが二つの人影の名を呼び、手を振り返す。

二人が四人に駆け寄り、それぞれが朝の挨拶をした。

他愛の無い会話をしつつ学校の校門をくぐる六人。

やがて六人の姿が学校の中へと消えた後、そこに突如黒いローブを被った誰かが現れた。

『……ふむ、どうやら上手くやってるみたいだな』

黒いローブを被った誰か 神はぽつりと呟く。

実は今この瞬間も様々な人が行き交っていたが、神の姿を認識した者は誰一人としていない。仮にも神だ、そう簡単に姿がバレては威厳もへったくれもない。

『あー、あー。こちら神だ。要君はちゃんと馴染んでいるぞ、そっちはどうだ？』

神がその場にはいない誰かへ言霊を送った。

「……こちら俺！　しっかりと受け取ったぜその言葉。そうか上手くやってるか……っと!？」

所変わりこちらは第五十四管理外世界。

知性を持つ生物は何も住んでおらず、原始的なジャングルと原始的な植物や動物が生息する世界だ。

そんなジャングルのぬかるんだ土の上を駆けながら、髪の毛の長い少年が叫ぶ。

「こつちも頑張ってますぜ！　管理局からの情報でBクラスの犯罪者がこの世界にいるって言われていざ来てみればAAクラスの魔導師だった事に圧倒的……誤差……!!　と思いつつ逃げてる！　どわっち!？」

叫ぶ少年のすぐ後ろで魔力弾が炸裂、勢いで周りの土が雨のように降り注ぐ。

少年がチラリと後ろを振り返り様子を見ようとしたが、飛んできた魔力弾が頬をかすめるようにして通り過ぎたので断念。代わりに

命は惜しいでござると叫んだ。

そんな少年の叫びに応えるかのように、少年の着ている服の胸ポケットから何かが姿を現した。

『ふああ〜……よく寝たです』

「お早う『フェンリル』。そして早速だが仕事だ」

フェンリルと呼ばれたそれは、よく御伽噺などに出てくる妖精のような大きさだった。

足元まで伸びる白銀の髪に、眠たげな真つ赤な瞳を持っている。

『ふえ……っひゃあ!? こゝこゝこは何処で私は誰です!?』

「というか今まで良く寝れてたよな……お前はアレか。のび太かつての」

『えへへ。褒めても何も出ませんです〜』

「その発想はなかった。どうわっ!？」

漫才のような会話を繰り広げていた二人だったが、間を飛んできた魔力弾を見て口をつぐんだ。

犯罪者はどうあつても少年達を逃がす気はなく、また自分も逃げる気はないらしい。先ほどから執拗に少年を狙っている。

『……とりあえず、やりますですか?』

「おう、やる。フェンリル！ 障壁展開！ 五秒持ちこたえる！！」
『余裕ですっ！！』

地を走っていた少年が突如急ブレーキをかける。その反動で土がえぐれあたりを飛び回るが関係ない。ポケットから毎度お世話になっている八卦炉を取り出し両腕で構え、魔力を溜める。

犯罪者が少年に魔法を撃たせてたまるかと魔力弾を無数に放つ。

『ささせませんです！』

が、少年を守るように立ちはだかるフェンリルがそれを許さない。

シャープペンシルよりも小さな身体から伸びる両手を前に突き出し、そこから障壁を発生させ魔力弾を防ぐ。

犯罪者にとって長く感じた五秒は、あっという間に訪れた。

「……OK！ 射線から離れるフェンリル！」

『了解です！』

飛んできた最後の魔力弾を防ぎきったフェンリルは少年の背後へ素早く移動。少年がフェンリルが移動したのを確認し砲撃をぶつ放す。

少年が十人はいても足りない太さの灰色の砲撃が犯罪者をあつという間に呑み込み、射線上にいた植物や生物を消滅させた。

流石にやり過ぎだろうが、少年にとってこれが最弱の魔法だった。これ以上は弱めようもないので仕方ない事である。

八卦炉が少年からもらった魔力を全て撃ち果たすと、灰色の砲撃が途切れる。

少年が犯罪者がいた辺りを見回すと、ギャグ漫画のように全身を真っ黒にしのびている犯罪者がいた。とりあえずバインドで縛っておく。

「……あー、もしもクロノくん？ 終わったから回収よろしくね」

ポケットから取り出した通信機に向かって一方的に少年が言い、向こうからの返答を聞く前に通信機をポケットに仕舞い込んだ。

『終わったですかー？ それじゃあ私はまた情眼を貪る系の作業に』
フェンリルが少年の服の胸ポケットに潜り込み、そこから出てこなくなる。少年の耳に微かな寝息が聞こえた。

「は、はええ……お前やつぱりのび太君の生まれ変わりだろ」

『えへへ……マスターに褒められた……』と胸ポケットから寝言が聞こえ、微かにため息をつく少年だった。

「……俺は一体どこで道を間違ったのやら」

通信を受けて世界へ降りてきたクロノが最初に見つけたのは、ど

ことなく哀愁漂つ少年の背中だったというのは余談である。

第19話 六年後の話 (後書き)

新章突入？ いいえエンディング間近です。小説の名前が酷いのでタイトル変えてついでにストライカーズ？ に突入する予定であります。今回もあとがきコーナーは無しですすいません。

灰音様、もみじ様。いつもいつも感想ありがとうございます。

エピソードぐ放課後魔法タイムぐ（前書き）

キングクリムゾン！ 時間と過程が飛び結果だけが残るッ！！

……つまりはまた時間飛ばしです。

エピソード〈放課後魔法タイム〉

月日が経つのは何て早いのだろうか。要はふとそんな事を考えていた。

最初はあれほど嫌だった学校も少し前に慣れてしまい、今となっては卒業間近となっていた。

なのはとフェイトは義務教育を終えたらそのまま管理局の正規の局員になるらしい。はやても似たような事になるそうだ。

「……君。要君！」

思考の波に漂っていると、ふと近くで自分の名前を呼ばれた。顔を上げると、そこにはどアップのなのは顔が。

「急に黙り込んでどうしたの？」

「……いや、些細な事だ。どうでもいい」

どこか腑に落ちない顔をしつつもそれ以上追求はしないのは。

二人は今夕日が差し込む通学路を歩いていた。時間帯からして帰宅途中のようだ。

「そういえば要君、学校卒業したらどうするの？」

ふとなのはからそんな事を聞かれる要。

「……どうする、とは？」

「私は管理局に入りたかって事は前に言ったでしょ？ 要君は入るんだよね？」

「……一応その予定だ」

ちなみにはやてとフェイトは先に帰っていた。二人は学校の委員会の仕事で少し遅れる事になっていたのだ。

管理局の仕事は良いのか？ と疑問に思う人もいるだろう。

だが、つい最近入局したとある青年が色々と頑張っているおかげかそれ程忙しくもないのだ。たまになのはが『働きたいの!』と癩癩を起こしそうになるが、ワーカーホリックにさせるわけにもいかないので残りの三人が全力で阻止していたりする。

しばらく無言の時間が続く。

が、突如通信機が鳴り出し、なのはがそれに応える事によって沈黙は破られた。

なのはが通信相手と短いやり取りをした後通信を切った。

「……行くのか」

「うん。行ってきますなの」

「……気をつけてな」

久しぶりの仕事に嬉々とした表情でどこかへ走り去るなのは。要はそれを追う事はしない。

ふと緩やかな風が吹き、要の伸び放題のボサボサの紅い髪を揺らした。もうそろそろ肩に届きそうだ。

「……そろそろ切るべきか」

神楽要という少年の事を良く知っていないと分からないくらいに薄く笑みを浮かべながら、要は今が我が家も同然のはやての家へとゆっくりとした足取りで歩いていった。

どこかで少女の勇ましい掛け声が聞こえた。

暗く、黒い空間が何処かにあった。

黒いペンキをぶちまけたようにも見えれば、深夜のトンネルの中のようにも見えた。

その暗さは自分の手を至近距離まで近づけても完全に見る事は出

来ないほどの暗さ。

そんな暗い世界に一筋の眩いばかりの光が差し込んでいた。

そこに照らされながら佇むのは黒いローブで全身をすっぽりと覆い隠した誰か。

『さて』

その誰か　　少年に神と呼ばれている　　は靴音をわざと鳴らしながら暗い世界を歩く。

『いい所なのだが、この物語はここでお終いだ。次回作にご期待下さいというテロップでも流しておきたい所だが、生憎そんなものは無いのでね。我慢してくれ』

神の口から軽やかな声が漏れる。

『要君は今後どうするのか？ 例の少年に名前がつく日は来るのか？ そして物語が変わる事はあるのか　　。あまり期待せず気楽に待つと良い』

しばらく彷徨つようにして世界を歩いていた神だったが、ふと足を止め、どこか一点を見るように顔を動かす。

『それでは一時のさようならだ。また会える日を楽しみにしているよ』

神がどこかに手を小さく振り、手を下げると同時にその姿が掻き消える。

後に残ったのは、役目を終えた光と真っ暗な世界だけだった。

エピソード〈放課後魔法タイム〉（後書き）

焼き土下座の準備は出来ているか？ 私と！

神「いい所を持っていった私の」

『ずっと作者のたーん！ のこおなあー！！』

神「短い、よく分からない、強制的に終わらせた。さて、読者達の反応が楽しみだな」

たまにタイトル変えましたとかいう小説あるけどやり方知らない。なのでここは思い切ってA's編が終わると同時にこの小説を終わらせてみました。後悔しかない。

神「その代わりSとS編はしっかりしているのだろうか？ または例の番外編など」

……しっかりしていると良いなあ。評価するのは読者様だしね。私には分からない。

神「まあ見捨てられないように頑張るんだな。私は応援しているぞ」

では長話はこちら辺にして。ほんの少しの私の休息タイムとなります。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2996t/>

魔法少女リリカルなのは～リリカル まじかるつい書いちゃったんだ～

2011年6月25日15時05分発行